リフレクトファンタズム　～Azure of Wonderworld～

鍔姫 水霧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リフレクトファンタズム　～Ａｚｕｒｅ　ｏｆ　Ｗｏｎｄｅｒｗｏｒｌｄ～

【Ｎコード】
Ｎ０８４１Ｗ

【作者名】
鍔姫　水霧

【あらすじ】
ある日、少年は力を手に入れた。否、本来持っていた力が『妖神』の少女と『妖刀』の少年との出逢いにより顕現したのだ。
彼は幻映の世界（ワンダーワールド）と呼ばれる蒼い世界で、少女と仲間を護るために力を使い、戦う事を決めた。

01：『出逢い』（前書き）

初めまして鍔姫水霧です。初めない方もどうも。

この小説で注意する事は・・・・・・

・不定期な更新
・厨二臭い発言
・仲間達のノリ

主にこの三つです。

これが平気な心の広い方は読んで下さい。
駄文ですが、よろしくお願いします。

01：『出逢い』

「くそ．．．．．．　何なんだ此処は．．．．．．」

「力を持つ人間、やっと見つけたぞ」

俺は今、自らを妖神（あやがみ）と呼ぶ、長い刀を持った少女に殺されかけている。

少女の左目元には紅い傷跡があり、髪は蒼く足元までである。

かなりの美少女で、ゆったりとした蒼いワンピースが似合っている。

説得力が足りなかったのでもう一度言おう。

俺は殺されかけている！！

◇◆◇◆◇◆◇

「２４０円で～す」

「はい」

「丁～度お預かりしま～す。レシートい～りますか～？」

「大丈夫です」

「ありがと～うございました～」

某週刊誌Ｊを買い、コンビニを出る。
店員の可笑しなテンションにも慣れた。何せ高校に入学してから半年以上、毎週月曜日の下校途中にこの週刊少年Ｊを買って帰っているのだ。

コンビニの近くにある神社へと続く、長い石階段を登っていく。
この神社の縁側で巫女さんと話をしたり少年Ｊ等の雑誌を読んだりするのが俺の放課後の日課で、静かに過ごせるこの時間を、学校のある日は毎日楽しみにしている。
まあ学校が無い日も参拝に来るんだがな。

「迅翔（はやと）さん、いらしてたんですか？」

「ああ、今来た所ですよ」

「お茶をお持ちしますね。ゆっくりしていって下さい」

「ありがとうございます」

彼女は　白葉木（しらはぎ）あやめ。
俺と同じ１６歳でありながら、一人でこの白葉木神社の巫女を務め

ている。
服装はやや特徴的な巫女服、髪は桃色で二本縛りである。
あやめさんがお茶を持って来た。

「どうぞ」

「では、戴きます」

隣に置かれたお茶を取り、啜る。
いつも美味しいが、今日は更に美味しい気がする。

「気付かれましたか？　茶葉を替えてみたんですよ」

「・・・・・・何時にも増して美味しいです」

「ありがとうございます！」

少年Ｊは既に読み終えた。
漫画などを高速で読める超技だ。ちなみに流し読みとも言う。

「どういたしまして」

「お茶菓子もお持ちしましょうか？」

「お願いします」

あやめさんが、お茶菓子を取りに神社の奥へと歩いていく。
染まり始めた紅葉を眺めながら、俺はゆっくりと瞼を閉じた。

秋の始まりには毎年、身の回りで不可思議な事が起きる。

去年は中学最期の学園祭で校長が司会をした。
一昨年は茶柱が十三本出来た。
その前の中学一年の時にこの神社を知り、あやめさんと出会った。

思い返せば、最初は緊張してあやめさんと喋れなかった。
それが今は毎日、家族以上に安心して話をすることが出来る。

あやめさんが団子を持って来た。
彼女も同じ様に、安心出来ると思ってくれていれば嬉しい。

「お団子です。お隣、よろしいでしょうか？」

「ええ、もちろんですよ」

あやめさんは予想通り、正座をした。
しかし彼女が正座が苦手である事を知らない俺では無い。

「縁側に座って下さい。足が痺れますよ」

「・・・・・・ありがとうございます」

あやめさんは脚を崩し、縁側に腰掛けた。
そして二本の串団子を取り、片方を俺に差し出した。

「さあ、戴きましょう」

「そうですね、戴きます」

差し出された団子を受け取り、一つ目を口に入れた。
ある歌では『弟想いの長男』である。美味い。
飲み込むと、あやめさんが話し掛けて来た。

「どうでしょうか・・・・・・・？」

「凄く美味しいです。特に舌触りですね」

「良かった・・・・・・　実は自分で作ったので、不安だったんです」

「そうだったんですか！？　有名な団子屋と比べても劣りませんよ」

驚きだ・・・・・・俺はむしろこっちの方が好きかも知れない。

あやめさんの手でこねた団子が俺の口に以下略な考えを叩き捻り擦り潰し、二つ目の団子を頬張る。
ある歌では『自分が一番　次男』。
ちなみに三つ目は『兄さん想いの三男』である。しっかりしてくれ次男。

「本当ですか！？　・・・・・・もう日が暮れますね」

「本当ですよ。今日はそろそろ帰ります、お団子美味しかったです」

三つ目を飲み込んでから言った。
日が暮れたら帰る、当たり前の事である。

・・・・・・まあ、もう少し話していたいとはいつも思う。
だが代わりに毎日会えると思えば大した苦にはならない。

「・・・・・・また来て下さい。ではお気をつけて」

「ええ、明日も来ます」

俺はいつも通り、長い石階段を降りていった。

しかし、見送ってくれていたあやめさんが居なくなった時だった。

俺は何者かに腕を掴まれ、現れた空間の裂け目に引きずり込まれたのである。

「来い、幻映（ワンダーワールド）の世界へ！！」

◇◆◇◆◇◆◇

で、冒頭に戻る。

空間の裂け目の様な謎の穴に引きずり込まれたと思ったらそこは全体的にうっすらと蒼く染まった元の町で、身の丈ほどの長さの刀を持った蒼髪蒼眼の少女が目の前に現れた。

疲れているのかとも思ったが（俺が）、幻覚にしてはリアル過ぎる。現実ならあの長さの刀を片手で持っている時点で有り得ないのだが。

・・・・・・兎に角、黙って殺されるのは厭だ。

「力なんて知らねえ。それに・・・・・・俺はまだ死ぬ訳にはいかねえんだよ！！」

俺は薄蒼い石階段を駆け降り左折、家の方向へと走った。

人が一人も居ない。

信号はあるが機能しておらずコンビニなどの光も消えており、車などは言うまでもなく止まっている。

そして、沈みかけの太陽は蒼い。

「逃げ切れると思うのか？」

「っ！？」

一瞬で眼前に現れた、冷気を纏った刃。
瞬間、膝から下が凍り付き、身動きが取れなくなった。

「くそ・・・・・　何で氷が・・・・・・・・」

「諦めろ、お前では私から逃げられん」

次に刃は、蒼い炎を纏った。

・・・・・殺される・・・・・・・・・・・・

そう思った瞬間、全長１０メートルはありそうな巨大な二本角の人型の何かが、俺を踏み潰そうと脚を突き出して来た。しかしその人影は一瞬で蒼い炎に包まれ、灰塵へと化した。

「っ・・・・・・・！？」

「・・・・・・雑魚が」

そう、少女が俺を守ったのである。

「・・・・・・何でだ」

「私が一度でも『殺す』と言ったか？」

「言ってない・・・・・・・けど、じゃあお前の目的は何だ？」

・・・・・・全く意図が読めない。
殺すつもりが無いなら、何故俺に刃を向けた？
何故、俺をこんな訳の分からない世界に連れてきた？
何故・・・・・・

「言った筈だ、力があると」

「力？」

思い当たる節は無い。
むしろ神と話せるあやめさんの方があると思うが・・・・・・

「・・・・・・私の本体はこの刀、名は『蒼影（そうえい）』だ。
私は私と同じ力を持つお前にしか扱えん。力を封じないと触れる事も叶わぬ」

「ちょっと待て、刀が本体だとしたらその身体は何だ？」

もう刀が本体と言われても驚けなくなってしまった。
蒼い世界、巨大な怪人、氷と炎を操る妖神？　を実際に見たからだ。

脚を覆っていた氷が霧散した。
そして少女、いや蒼影は、俺の質問に目を閉じて答えた。

「この少女は記憶を失った、妖神の一人だ。幼く見えるが千年は生きている。
ある日、人間を見下す妖神に対し異議を唱え、九割の力と記憶を封印された。
今も逃亡中だが、私を扱えるお前なら他の妖神達から護れるかも知れない。
・・・・・・・どうか頼む。この子を護ってくれ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・！！」

「・・・・・・・お前は何で、その子を護ろうとするんだ？」

「私は・・・・・・・昔、約束したんだ。『永遠に護る』、と・・・・・・・・」

「そうか・・・・・・・・・・・・・　っ！！」

瞬間、重力が強くなった様な感覚に捕らわれた。

圧し潰されそうな程の圧力、その発生源である電柱の上には四本角の人影。

「来たか・・・・・・・　人間、鬼の妖神だ！！」

「・・・・・・・・・あれが妖神・・・・・・・」

勝てる気がしない。さっきのデカいのは本当に雑魚だったらしい。

四本角の妖神・・・・・・・鬼は音も立てず地面に降り立ち、言い放

った。

「力を持つ人間・・・・・・　先に消す！！」

有り得ない圧力を放ちながら、鬼の拳は俺の頭へと放たれた

01：『出逢い』（後書き）

戦闘は次話になります。すいません。

感想や駄目出しから学校や職場等への愚痴まで、何でも受け付けます。

メッセージボックスは多分見ないので感想の一言からどうぞ。

最初に言った通りの駄文ですが、生暖かい目で見守って頂ければ幸いです。

０２：『力の目覚』（前書き）

どうも鍔姫水霧です。

最近ハマってるゲームとかが無いです。

何が言いたいかというと、暇です。

02：『力の目覚』

「っわぁ！！」

「！？」

とっさに身を屈め、偶然にも鬼のパンチを回避出来た。
が、地面は大きく削り取られ、その圧力で俺は前に飛ばされた。
蒼影に抱き止められ、何とか無傷の状態である。
それにしても・・・・・・・・・

「本当にまな板だな」

「黙れ人間！それどころでは無い！！」

蒼影が左手を突き出すと前方が放射状に凍り付いた。
さっきの話から考えると、これは蒼影ではなく少女の力だろう。
九割封印され、残った一割のみでこの威力だ・・・・・・・・

千年生きた妖神の力は、やはり凄まじいらしい。

「そのまま戦った方が強いんじゃないのか・・・・・・？」

素直な疑問である。

こんな滅茶苦茶な強さなら、俺に頼るより普通に戦った方が良いと思う。

唯の人間が強い刀を持っただけでは、戦えるはずが無い。

「・・・・・・妖神がこの程度で死ねば、苦労はしない。

蒼姫(あおひめ)程の力なら一割でも太刀打ち程度は出来るが、倒しきるのは骨が折れる。

私は同じく千年以上生きた妖刀だ。今まで誰も扱いきれなかった。

だが最高に相性の良いお前の力なら、私を扱うことも可能やも知れん」

「だから力って何なんだ？お前にもあるのか？」

・・・・・・力。

さっきからよく出て来る言葉だが、この状況下でも本当に分からない。

単純に考えれば、人間の域を超えた何かしらの能力のような物だろう。

思い当たる物は無い。成績も体力も平均の少し上だ。

本の流し読みは速いが、相性とか言う以前に戦えないし使えない。
まず相性が良いという蒼影の力を聞いて、近いもので考えるべきだ。

「妖と僅かな人間のみが所有する特殊能力。私の場合、全てを斬る力だ。
無論お前が私を扱おうと、文字通りにまで力を解放する事は困難だが・・・・・・
それを差し引いても相性は抜群に良い」

「全てを斬る能力と相性が良い・・・・・・？」

つまり、どんな物でも確実に斬るという事か？
そんなふざけきった滅茶苦茶な能力に相性なんて関係無いと思う。
・・・・・・・いや、その滅茶苦茶な物を『扱う』為に必要な能力、か。
まず長すぎて持てないし。いや、その程度はもう関係無いな。

「・・・・・・雷の能力だ！早く私を取れ！！」

鬼を閉じ込めていた巨大な氷が、崩れ始める。

俺は少女が差し出した妖刀、蒼影の柄を、握り締めた。

「雷の能力・・・・・・　本当に、これで勝てるんだな？」

「お前次第だ、人間」

瞬間、俺と少女と蒼影は、蒼い光に包まれた

◇◆◇◆◇◆◇

どうやら『変わった』みたいだ。

蒼と黒の上着に白い胴着と黒い袴風ズボン、それに似合わぬ黒いブーツ。

頭髪は少し伸び、以前の焦げ茶とは真逆の蒼。

そして身体の内側からは、鬼を遥かに上回る大きさの『妖力』を感じる・・・・・・

おそらく蒼影の意識の一部が伝わって来ているのだろう。

「成功した様だな、人間」

「霧貴迅翔だ・・・・・・　蒼姫だっけ？　は、担いで戦えば良いだろ？」

「・・・・・・随分余裕らしいな人間。いや、霧貴迅翔」

振り返ると、そこには四本角の鬼が無傷で立っていた。

あの巨大な氷の攻撃も、傷を付けるには至らないらしい。

鬼のパンチを蒼影で受け流し、雷で追い討ちを掛ける。

・・・・・・が、やはり最初から使いこなせる訳も無く、数人分離

れた電柱に命中した蒼白い雷は着弾と同時に大爆発を起こして消滅した。巻き込まれたら自分も危なそうだ。

「蒼影、雷纏わせても大丈夫だよな？」

「愚問だな、私がその程度で傷付く訳が有るまい」

蒼影に雷を纏わせ、攻撃力を上昇させる。本当に上がったかは知らんが。

「・・・・・・ほう、最初の段階でそこまで力を操るか。妖力もかなりの物だ」

「お前を倒す力だ。これぐらい無いと無理だろ？」

鬼に斬りかかる。
蒼姫の身長以上の刀身を誇る蒼影は、おそらく全長１６０ｃｍを越えている。
俺の身長から考えると１６１、２ｃｍぐらいはあるだろう。
まず普通の人間には持てない。本当に人間卒業してしまったのか・・・・・

それはさておき、とにかくリーチが長い。
１メートル程度は離れていても、普通に斬撃が届くのだ。

「流石は伝説の妖刀、そしてそれを扱う者。俺の肌を斬るか」
「１２発中１１発を躱したあんたに言われたくないな」
「本気を見せない者の台詞では無い」
「ばれてたか・・・・・・　俺自身も本気が分からないから、少しずつ出してる」

お互い力の探り合いか・・・・・・　いや探られてるのは俺だけだが。

どちらにしても、この鬼が本気になれば勝てない。
本気を出せれば多分互角だが、剣道の経験だけでは妖力なんて引き出せない。
しかも中学の時の剣道部なんて半分遊びだったし・・・・・・

「・・・・・・何を考えてるかは知らんが、蒼姫だけは護れ」
「まあ、とにかく大丈夫だ」

蒼影は蒼姫の保護者的存在らしい。
そして会話中は待ってくれる鬼は意外と良い奴なのかも知れない。

「さて、こんな使い方はどうだ？」

「・・・・・・本当に戦闘経験の無い人間なのか貴様？」

雷を帯状にして全方向へのバリアを創り、脚にも雷を纏わせた。
おそらくスピードが上がる筈だ。

「頭に浮かぶ戦法を実践してるだけだ。何か頭が冴えてな」

「『力』ではなく『才能』か・・・・・・」

「知らねえよ」

雷の出力を制御出来る範囲で最大にして鬼の背後へ一瞬で移動。
バリアに使っていた雷も同時に、鬼へ向けて一撃を放った。
蒼姫を左手で抱えているので片手だが、威力も速度も充分にある・・・・・

しかし渾身の一撃は、突如現れた、鎌と槍が一つになった様な武器に弾かれた

「な・・・・・・」

「・・・・・・摘んでおくべきか」

「！！　逃げろ迅翔！！！！」

蒼影が叫んだ。今までの話し方からは想像のつかない、恐怖と焦燥の声だ。

逃げよう。

鬼の妖力も、俺の想像より遥かに大きくなった。

自分の力が分からず、片手まで塞がった状態では絶対に勝てない。

本気の本気でも勝てないであろうこの鬼は、危険過ぎる．．．．．．

今日二度目の逃走．．．．．．勝てない敵に背を向け、ただ全力で走る。

男としてどうとか言ってられないのだ。これで戦って三人とも死ぬか、逃げて三人とも生き延びるかだ。俺は迷わず逃げる。それがどんなに醜く不格好でも．．．．．．

だが、俺はその考えが甘いことを知る．．．．．．

鬼は一瞬で眼前に現れ、俺の頭を右手で掴んで持ち上げた。

「く．．．．そ．．．．．．．！！」

「．．．．．．．迅翔っ！！」

「終わりだ、霧貴迅翔。『蒼の妖神』も『蒼の妖刀』もだ」

握り潰す様に、異常な力が鬼の手に込められていく。

蒼影を振ろうとしたが、頭部の激痛で右手からぬけ落ちた。

しかし、左手で何とか抱えていた蒼姫を放しそうになった瞬間だった。

白銀の刃が、鬼の腕を斬り落とした

「迅翔さん・・・・・・　後は私に任せて下さい」

そこに居たのは、白黒の巫女服に長刀(なぎなた)のようなお祓い棒を持った巫女だった。

・・・・・・というよりこの声は・・・・・・・・・

「あやめさん!?　なんで此処に・・・・・・・・?」

「神に仕える者が、こっちの世界に来れては変でしょうか?」

いや、確かに神と話せる能力はあったが・・・・・・

「・・・・・・白葉木の巫女か」

「これは安心だな。迅翔！その巫女が味方なら大丈夫だ」

「あ、ああ」

地面に刺さっていた蒼影を取り、もう一度あやめさんを見る。
頭には狐らしき耳があり、腰からは三本の尻尾が生えている・・・・・・

「・・・・・・本当にあやめさんですよね？」

「はい、間違いないですよ。
迅翔さんが帰ってすぐに妖力を感じ、この世界を見に来たんです。
・・・・・・鬼の妖神！立ち去るなら滅ぼしませんよ！！」

既に腕が再生していた鬼はあやめさんの言葉を聞き、後ろを向いて
言った。

「茨木千夜（いばらきせんや）だ。精々その力に慣れておけ」

四本角の鬼、茨木千夜は、一瞬にして蒼い闇へと消えた

０２：『力の目覚』（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます。
感想等よろしくお願いします。

０３：『幻映の世界』（前書き）

どうも鍔姫水霧です。

ホラーって良いですよね。
怖いのに見たいという不思議性的な何かがあると思います。

それと今回の話は殆ど解説です。
面倒な方は最初と最後だけ読めば展開は分かりますので、お好きにどうぞ。

03：『幻映の世界』

「・・・・・・あやめさん」

「はい？」

「色々と質問して良いですか？」

「・・・・・・そうですね。なんでもどうぞ」

四人は白葉木神社へと戻り、意識のない蒼姫を布団で寝かせた。
蒼影曰わく「そのうち目覚める」ので、あやめも術などは施していない。

そして人間二人は縁側で話している。
三つあったあやめの尻尾は無くなり、耳も同様に消えている。
既に日は沈んだが、世界はうっすらと蒼いままである。
蒼髪の迅翔は、この世界を知っているであろうあやめに疑問をぶつけた。

「まず、この世界は何なんですか？
人は居ないし、太陽は蒼いし、怪物までいるし・・・・・・」

「・・・・・・『幻映の世界』と、私達は呼んでいます。
ここに存在する生物は全て霊力や妖力、魔力、神力などの『現実には存在し得ない』力を持った妖怪、悪魔、神などです。この三つの勢力が他を抑制し合い、この世界のパワーバランスが成り立っています。時に妖怪や悪魔は神格化して基本種を遥かに超越した力を手にし、それらが勢力を纏めるリーダー格を務めます。神格化した妖怪を『妖神』、悪魔を『神魔』と言い、これらと神は基本的に人間の姿をしています。この世界と元の世界とでは基本的に干渉が出来ませんが、妖神や神魔の中の一部には干渉出来る力を持つ者もいます。神社を持つ神が代表的ですね。そして時間軸は元の世界とは違い、こちらでの十分があちらでの一分・・・・・・つまり十分の一で進行しています。全てが現実の、というより元の世界とは違う世界です」

「・・・・・・幻を映した世界、という事ですか？」

「その通りです。長いので私は『映世』と呼んでますよ」

「いいね映世。あ、すいません」

「・・・・・・もう敬語止めよ？」

「そう・・・・・・だな。あやめで良い？」

「勿論。その代わり・・・・・・・・・・」

「その代わり・・・・・・・・・・？」

「私はやっぱり敬語しか使えません」

「・・・・・・はははははは」

「あはははははは」

呑気な人間二人は、この異様な世界の中でも笑う。
蒼影の力により自身の力が覚醒した迅翔は冷静だ。本人も気付いていないが普通なら混乱してパニックに陥り、発狂したり、元の世界に帰してくれと喚く事だろう。

人の姿に変化した蒼影は蒼姫を看ていたが、五月蠅(うるさ)さに耐えきれず二人を睨み、怒鳴った。

「少し黙れ!!寝息が聞こえんだろう!!!!!」

予想していなかった蒼影の発言に二人は微妙な表情を浮かべた。

妖刀・蒼影は、蒼姫に溺愛している。
人間の姿になった蒼影は十四歳程度の痩せ型の少年で、対する蒼姫の容姿は十歳にも満たない程である。一見兄と妹にも見える二人であり、蒼影の蒼姫に対する感情は文字通り家族に近いものである。
寝息にまで聴き入るのは多少異常だが。

「蒼影・・・・・・気持ち悪いぞ」

「蒼影様・・・・・・・・」

「姫・・・・・・　私にもっと力があれば、こうならず済んだのか・・・・・・・・・」

蒼影は二人に構わず、蒼姫を見つめる。

この場合の姫という呼び方は、王の娘という意味では無い。
蒼姫と蒼影、読みは違えども『蒼』という文字を持つ名である。二人・・・・・・今は蒼影しか確認出来ないが、同じ字を持った違う人間（人間と呼べるかは疑わしいが）として、『蒼』では無く『姫』という呼び方をしている。
しかし蒼影は過保護気味であり、生活が本物のお姫様の様になりそうである。

迅翔は「駄目だな」と呟き、あやめに二つ目の質問をした。

「・・・・・・さっきのあやめの尻尾と耳は？」

「あれはこの神社の神様の十八尾、桃綺（とうき）様の力を借りたものです」

あやめが本殿を人差し指で指して言う。

「ちょっと待った、十八尾！？　九尾じゃ無くて？」

「ええ・・・・・・　有名な九尾の話は千年ぐらい昔の事ですよね？あの頃は妖獣というただの妖怪の中の一種でしたが、殺されたと見

せかけて逃亡してから妖神に昇格して、神社も建てて神力も増えていったんです。そしたらポコポコと生えてきたそうですよ」

「無茶苦茶だ・・・・・・」

と言いながらも、迅翔はあやめの話を正確に受け取っている。
そして疑問を質問に変えてあやめに返す。類い希なる冷静さである。
この場合は無理矢理感化されていると言う方が正しいが。

「神力って、神様としての力の事？」

「その通りです。あとは人間の霊力、悪魔や神魔の魔力があります。とはいっても四つの違いなんてほとんど無いんですけどね」

『人間の霊力』という言葉を聞き、迅翔は自身の『力』を確認する。
すると妖力と同じ様に存在する『霊力』が、迅翔には容易に確認出来た。

「霊力・・・・・・俺にもあるな。ていうかほとんどって事は、多少はあるのか？」

「うーん・・・・・・　若干ですが、妖力は魔力に強くて、魔力は霊力に強くて、霊力は妖力に強いですね。逆に魔力で妖怪に攻撃したりしたら少し弱まります。
神力はどれにも強いから有利です。攻撃は普通に受けますが」

「・・・・・・ずるいな」

相性が良ければ有利に決まっている。同じ量でも、火に水を掛けるのと油を注ぐのでは訳が違う。あやめの『若干』という言葉が無ければ、相性のみで勝敗が決まるものと勘違いしてもおかしくないだろう。

「私は霊力と桃綺様の妖力と神力が使えるので、人以外に対しては相性が最高に良いんです。だから白葉木神社の巫女は代々、妖怪・悪魔退治を務めてるんですけど・・・・・・　その二人は例外的に、退治しない妖神なんです。人妖魔神平等という言葉を、桃狐様の産まれるより昔から掲げていたそうですから」

「そうなのか・・・・・・　この二人はそんなに昔から戦ってたのか」

「桃綺様は『誰より強い妖神と妖刀』だったと仰っていました」

「へえ」と感心していた迅翔は、新たな疑問を見つける。『最強の妖刀・蒼影』を扱える人間や妖神が、その時居たのか、居なかったとしたら何故最強と言われたのか？

「その時、蒼影を扱える人とかは居たのか？」

「・・・・・・蒼影様を扱えたのは迅翔さんと、完全な状態の蒼姫様のみです。

蒼姫様が蒼影様を構えた時は、大妖怪が戦意喪失する程強大だったそうです」

「大妖怪？」

迅翔が首を傾げる。
文字通りに受け取れば強い妖怪だが、この世界では何があるか分からない。
質問しておく迅翔の判断は正しいと言えるだろう。

「妖神では無い、一般的な妖怪の域を越えるほどの力を持った妖怪の事です。妖神とは違い、昇格では無く強大化した妖怪ですから、その能力は妖神にも引けを取りません。
・・・・・・・最も、最近は妖神達に弾圧されつつありますが。
ちなみに大悪魔と神魔の間でも、同じ様な事が起きています」

「へえ、純粋に強い妖怪、か」

「そうですね。妖神が大妖怪に寝首を掻かれる事もあります。
お二方は既に敵対しています・・・・・・今は私達全員ですね」

俯いた視線を迅翔に向け直し、苦笑いしながら言う。
あやめを三年間見てきた迅翔には、それが無理に作った表情である事は分かっていた。原因や過程がどうだったとしても、結果的には迅翔があやめ達を巻き込んだのだ。
確かにあやめは白葉木神社の巫女として妖怪共や悪魔共を退治して来たかもしれない。だが鬼が引いたのを見る限り、桃綺の無言の圧

力か何かが背後にあり、手出しをするべきではない人間だった筈である。しかし妖神達に命を狙われる二人とその片方の力を扱う人間を白葉木神社が匿ったとなれば、神社ごと潰しに来る可能性も出て来るのだ。

迅翔は話題を変える事にした。賢明な判断である。

「・・・・・・そうだな。
ところであやめは、尻尾を十八本も出せるのか？」

「いいえ、今では七本が限界です。
桃綺様は元大妖怪の妖神なので、五本で並の妖神と並びます」

あやめは二本の指を伸ばした右手を、顔の側で開いていた左手に添えた。
そして右手で二回左手をポンポンと叩くと、右手を降ろした。

「・・・・・・千夜とかいう鬼は雑魚だったのか」

尻尾三本のあやめを見て千夜は逃げた。
迅翔の言う通り、あれでは雑魚に見えるだろう。

しかしあやめの次の言葉は、迅翔が予想していないものだった。

「茨木千夜は全ての鬼の副頭領を務める、強大過ぎるほど強大な妖

神です。
さっきも手加減をしていなければ簡単に私達を殺せたでしょう。
・・・・・・・昔桃綺様が戦った際は、尻尾を十二本出しても互角以上だったそうです。
その時の限界が十三本でしたから、当然あちらも強くなっているでしょうね」

「・・・・・・今、桃綺が全力で千夜(あいつ)と戦ったら、勝てるのか？」

「十八尾の桃綺なら勝てるが、今の巫女や迅翔では到底太刀打ち出来ん」

「蒼影様・・・・・・　仰る通り、千夜に勝てるのは桃綺様ぐらいでしょう」

迅翔の質問に答えたのは、蒼姫を看(ながめ)ていたはずの蒼影だった。
そしてあやめが話すのと同時に、蒼影は横にずれて畳の方に視線を向けた。
そこには、迅翔が初めて見る、自分自身の意思で上体を起こした蒼姫が居た。

「・・・・・・おはよ・・・・・う・・・・・・・・・？」

記憶を失った蒼い妖神が、迅翔には、ごく普通のか弱い少女に見えた

０３：『幻映の世界』（後書き）

感想等よろしくお願いします。

０４：『帰宅』（前書き）

どうも鍔姫水霧です。

04：『帰宅』

「・・・・・・・おはよう？」

「・・・・・・・おはようございます？」

「今は夜だろう！」

蒼影の的確なツッコミで俺とあやめは蒼姫に感化されずに済んだ。
空には青い蒼い満月が、世界を見下ろす様に妖しく輝いている。

「影（えい）・・・・・・・　その人たち、だれ？」

「霧貴迅翔と白葉木あやめ。二人とも私達の味方だ」

「うん・・・・・・・・・・よろしく。迅翔、あやめ」

「・・・・・・・ああ。よろしく」

「・・・・・・・よろしくお願いします」

やはり、普通だ。

話し方にはあどけなさが残り、声も透き通った女の子のものだ。
最強の妖神のイメージとはかけ離れている。純粋無垢な少女にしか見えない。

「さて、これからだが、迅翔の家に泊まらせて貰うぞ」

「ちょっと待て！！
俺の家に泊まる！？　冗談じゃ無い！！
親は居ないから許可を取る必要は無いけど、妹の茜がいる。
面積的には足りるけど茜に話せば二人の事を聞かれるし、妖刀と妖神だって説明して納得する訳もないし、嘘を吐いても騙し続けるのは無理だろ。
実際に力を見せる事も出来るけど、茜の中の常識が壊れる上に戦いに巻き込まれる可能性も出てくる。茜が『力』を持っている可能性も無くは無いけど、俺は出来るだけ人を巻き込みたくは無いんだ」

Ｔｈｅ．正論だと思う。ていうか間違いない。

「・・・・・・神社に泊まるのはどうでしょうか？」

「迅翔が私を使うんだ、常に離れる訳にはいかん」

やっぱり駄目か・・・・・・

蒼影は「悪いな」と言いつつ、手元に創り出した鞘を投げてきた。

「・・・・・・・え？」

「私の鞘だ」

７０ｃｍも無い黒い鞘。
俺の身長と一回りも変わらない長さの蒼影が収まる訳が無い。

「取り敢えず私を取れ」

「あ、ああ・・・・・・」

右手を身体の前に出し、その場に柄がある様にイメージする。
開いていた手を握るとそこには本当に蒼黒い柄があった。
割と勘で出来るもんだなと思いつつ蒼影に質問する。

「で、どうすんだ？」

「私を納めろ」

「・・・・・・分かった、もう何も驚かねえよ」

どうせ鞘の中が異空間になっていたりするのだろう。
俺は左手の７０ｃｍ以下の鞘に右手の刀身１２０ｃｍ以上の蒼影を

納めた。
物理法則が通用しないこの世界では当たり前の事なのかも知れないが、物理法則の中で15年は生きてきたのでいきなり慣れろと言われても無理がある。
申し訳無さそうな目をしているあやめさんは悪くないが。

「長すぎて納めづらいな」

「抜刀時に長さを替えられる。私の能力の一つだ」

「まじか」

右手で握ったままの蒼影を『鞘程度の刀身』で抜刀する。
すると一般的な日本刀ぐらいの長さの蒼影が。

「・・・・・・ つまり抜刀と納刀を巧く使うと良いと？」

「そう言うことだ。
刀身を伸ばしすぎても重量は殆ど変わらんが納刀時に隙が出来る。
ただ、お前が敵を倒すことしか考えずに抜刀すると危ないからやるなよ」

俺が柄を放し、元の人型に戻った蒼影。
鞘は霧散したが再び左手元に召還できた。

「具体的にはどうなるんだ？」

「私に喰われる．．．．．．。
私は妖刀だ。抑えねば人間の脆弱な自我など簡単に喰らい尽くしてしまう。
最も、抑えてでも扱えるのはお前しか居ないがな」

「．．．．．．蒼姫は扱えていたと聞いたけど？」

「私の妖力を物ともしない妖力の持ち主なら、当然耐えられる。
お前も見た筈だ。十分の一の力を」

．．．．．．確かに。
本来はあの冗談みたいな力の十倍の力の持ち主だ。
規格外が規格外を扱えるのは分かるし、おそらくは．．．．．．他にも理由がある。

「蒼影と蒼姫は、兄妹か？」

「．．．．．．．．今は言えぬ」

「影はお兄ちゃんなんでしょ？」

「ああ、姫は私の妹だ。私が守る．．．．．．．．」

優しい嘘、なのだろう。
蒼影はその容姿に見合わない悲しみの表情を押し殺している。

蒼姫は薄々気付いているのだろう、一瞬だけ少し表情が歪んだ。
しかし、性格も幼い筈の蒼姫はその疑問を噛み殺す様に笑っている。

「・・・・・・さあ、今日はもう帰りましょう。
おそらく現世(あちら)でも夜になる頃です」

「そうだな。影、姫、帰るぞ」

「うん」

「分かっている」

あやめが話題を換えてくれて助かった。
とは言え、映世から現世へ帰る方法など俺は知らない。

「あやめ、どうすれば帰れるんだ？」

「この神社の鳥居をくぐれば帰れます。帰る時は力を解いて下さい。
蒼影様は蒼姫様と自分の力の二つを封じて下さいね」

「解かないとまずい・・・・・・よな。まず髪の色と服が違うし」

「異議はない」

「良く分からないけど・・・・・・いいよ」

「それじゃあ、行きましょう」

俺達四人は、白葉木神社の階段の所にある鳥居をくぐった

◇◆◇◆◇◆◇

「ふう、戻ってきましたね」

「目が痛い」

「・・・・・・すごいね」

「現世の『夕暮れ』と言うやつか」

映世に入った時から殆ど時間が進んでいない。

・・・・・・やはり夢では無かったのだ。二人も確かに居る。

蒼姫は左目元の涙の軌跡にも見える紅い傷跡が消えた。

蒼影も同じく左目の下の黒い二本の横線の様なものが消えている。

そして話す間も無く、橙色の太陽は完全に沈んだ。

・・・・・・まずい。とてもまずい。

何がまずいかって？　我(あかね)が家の妹だ。

「影！姫！　急げ！！」

「？」

「え？」

「雷が落ちる！！」

「・・・・・・大丈夫です、私も行きます！！」

あやめの協力も得て、俺達は霧貴家へと走った

◇◆◇◆◇◆◇

遅い。

・・・・・・・日没。

六年前、私とお兄ちゃんが二人暮らしになる時に決めた、霧貴家の門限。

一つは身の安全の為。
もう一つは・・・・・・　直接は言えないが、早く帰って来させる為。
その理由は単純に、私がお兄ちゃんを大好きだからだ。

しかし今日は、門限を過ぎても帰って来ない。
お兄ちゃんが門限を破るのは、三年前の時以来の事だ。

あの時は仕方無かった。
白葉木神社に刃物を持った男が押し入り、あやめさんに襲い掛かろうとした。
それをお兄ちゃんは、あろうことかナイフを左手で握り潰して止めたのだ。
男は逮捕され、お兄ちゃんは大量出血で病院へと運ばれた。
奇跡的に左手は完治したものの、数週間は刃物を見る度に壊そうとした。
今は刃物の扱いも一般より遥かに上手いが、ナイフは駄目である。
それだけお兄ちゃんを変える事件だった。

今回も、何かあったに違いない。
いつ病院や警察から電話が掛かって来るか分からない。

無意識の内に電話機の方に目が行く。
しかし電話は掛かってくることは無く、時間は過ぎて行く。
折角用意しておいたコーヒーもすっかり冷めてしまったので、席を立った。

玄関で待っていよう。疲れ果てて帰ってきても大丈夫なように。

・・・・・・と思って玄関に行くと、外から複数人の声が聞こえて

きた。

「・・・・・・ここだ」

「普通の家だな」

「？」

「迅翔さん、兎に角インターホンを」

「聞こえてるわよ」

玄関扉を勢い良く開き、私はその場にいる四人を見た。

一人目。茶髪茶眼、身長１７０程度。言うまでもなくお兄ちゃん。
二人目。桃髪桃眼、身長１５５程度。巫女服のあやめさん。
三人目。蒼髪黒眼、身長１６５程度。コートを着た１３、４歳の男の人。
四人目。蒼髪黒眼、身長１３０程度。ワンピース姿の幼い女の子。

誰か分からない。訳も分からない。
・・・・・・・取り敢えず門限に間に合わなかった理由を聞こう。

「何かあったの？」

「・・・・・・・いや、まあな」

お兄ちゃんは言葉に詰まり、チラとコート（？）姿の人を見た。

「まあ、なあ」

「・・・・・・・話すと長い、です」

「？」

コート姿の人はあやめさんに視線を向け、あやめさんは曖昧な返事をした。

幼い女の子は状況を把握出来ていない様子。

・・・・・・・長くなるなら、上がって貰おう。

「取り敢えず、上がって話しましょ」

「・・・・・・・そうだな」

「すいません」

「すまない」

「おじゃまします」

お兄ちゃんに続いてあやめさん、コートの人、女の子が玄関に入り、最後に私がドアを閉めた。鍵は掛けなくても大丈夫だろう。

お兄ちゃんは、席に着いた私に向けて、口を開いた。

「端的に言うと、人間卒業した」

余りにも予想外な発言に、私はしばらく反応出来なかった

０４：『帰宅』（後書き）

感想等よろしくお願いします。

05：『奇襲』（前書き）

どうも鍔姫水霧です。

米一袋分（デカいやつ）は太ったのでダイエット中です（、・ω・、）

05：『奇襲』

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・ちゃんと説明します」

固まってしまった茜にあやめが言った。
俺も茜に同じ事を言われたら多分固まるので仕方無い。説明不足なだけだが。
・・・・・・・いや、この場合ちゃんと説明しても変わらないだろう。

「まず、私は妖刀だ。名は蒼影と言う」

「妖刀・・・・・・って、漫画とかでよくあるあの？」

「そうだ」

「へぇ・・・・・・そうなんだ・・・・・・・」

・・・・・・・ 驚いた。
門限を破った事を怒っていないのもだが、冷静に話を聞いている。
珍しそうにはしているが、別に疑っている様には見えない。

「そしてこの子が妖神の蒼姫。私達二人はある理由で逃亡中の身だ」

「妖刀の蒼影と妖神の蒼姫・・・・・・・ 逃亡中って、何か悪い事したの？」

何故冷静なのだろう？
ああああれか。意味不明過ぎて逆に冷静になる、俺も絶賛体験中のあれか。
何か色々とまずい気もするが話は進むから楽だ。

「まず、この世界の裏側にもう一つの世界があることを説明しておく。
『幻映の世界（ワンダーワールド）』・・・・・・・ 俗に映世と呼ばれる、薄蒼い光に包まれた世界だ。其処には妖怪や悪魔等、この現世のあらゆる『非存在』が存在している。
その中でも現世の存在からは非存在としての認識すらされていないのが、妖怪が神格化した妖神と、悪魔が神格化した神魔と言う二つの種族だ」

「神格化って・・・・・・・ 簡単に言えば強くなったって事よね？」

「その通りだ。大妖怪と大悪魔も居るが、それの説明は後にしておく」

「そうだな、今は状況の説明が優先だ」

「そうですね・・・・・・　恐らくはこれから大変になりますから」

一応会話に入っておく。空気にされないためだ。
あやめもちょくちょく話している。同じ事を考えているのだろう。
そして蒼姫はというと、疲れたのかソファーでうつ伏せになり寝ている。
変に話に入れなくなるよりは良かったと思う、可愛いし。

「・・・・・・姫は、全ての種族の平等を訴えていた。
妖怪や悪魔は人間を襲い、人間は神の力を借り退治する・・・・・・結構な事だ。
しかし単純な力で人間に勝ち目は無く、人間は妖魔の存在にすら目を背けた。
弱い人間を神は見放し、妖怪や悪魔は絶望してこの世界に移住したのだ。
四つの種族の中で最も劣っているのは人間だと、残り三つの種族は口を合わせて言う。しかし人間はそれを聞きすらせず、いや聞き取ることも出来ず、自分達が至高の存在だと信じて疑わない。人間は正に愚鈍と脆弱の象徴であり、蔑まれるべき存在だった。
これが勘違いだと、人間にも良いところがあると訴えたのが、姫だ」

俺も初めて聞いた・・・・・・　愚鈍と脆弱の象徴、か。

言われてみれば確かに人間は愚かで弱い。嘘も裏切りも厭な程ある。
そして良いところ・・・・・・・・か。　姫は何を見てそう思ったのだろう？
記憶を消された今では聞くことも出来ない。

「酷い言われようね・・・・・・
姫ちゃんは他の奴らから良いように思われないから追われてるの？」
「その通りだが、自分達へ害を及ぼしかねないと付け足した方が正しい」

全く、ふざけている。
奴らは自分達が考えを変える気はハナから無いらしい。

「・・・・・・・・妖力が近付いてます！　かなり速い・・・・・・・
おそらく天狗です！！」
「チッ・・・・・・・　やはり人間の姿になると二人分の妖力まで隠しきれんか」
「取り敢えず家の外へ行け！家が壊される・・・・・・・っ！？」

地鳴りと爆音と共に家の屋根が綺麗に吹き飛んだ。

幸い、誰も下敷きにはならなかった。

おそらく妖神とかの攻撃だ・・・・・・　でも現世には居ない筈じゃ・・・・・・？

と考えていた瞬間、茜が叫んだ

「・・・・・・消えて！！」

その声と同時に突き出した両手から、紅い雷が放たれた。

そして、鴉の翼を持つ人影は消え失せていた。

「・・・・・・茜・・・・・・・・・？」

「おい茜！何故雷が出せる！？」

「・・・・・・三年前、突然使えるようになったの。

切欠なんて無かったから、私はずっと隠してた。

・・・・・・勿論、妖怪とか悪魔とかが実在するなんて知らなかったわ！

でも．．．．．．だから、お兄ちゃん達の話を聞いてる間、ずっと考えてたの。
多分、人間を卒業しちゃったのは私もだって！！」

茜の言い放った事に、俺はすぐに言葉を返すことが出来なかった

◇◆◇◆◇◆◇

「．．．．．．．．」

背中にある鴉の翼を見る。
右の一部分の羽根が軽く焦げ付いている。
軽く動かすと数枚は抜け落ち、風で崩れ去った。
良く見ると右脚も少し焦げている様だ。
軽傷だったので二ヶ所に妖力を注ぎ、治した。

「やれやれ・・・・・・　妖力を感じて少し手を出したら反撃を喰らうとは」

今の時代にも、霊力を扱える人間は居るらしい。さっきの攻撃は人間の物だ。
さて、これは天狗情報共有サービス『天狗ッター』で呟かなければ・・・・・・・・

現世に残った種族の一つ『天狗』。
その文化は人間と同様に進化しているのである。
私は妖力フォンを取り出し『戦える人間発見！反撃されたｗｗ』と呟いた。

０５：『奇襲』（後書き）

感想等よろしくお願いします。

０６：『最初の夜』Ｉ（前書き）

どうも鍔姫水霧です。
季節の変わり目なので喘息が酷いです．．．．．．

06：『最初の夜』Ⅰ

「姫・・・・・・　本当に大丈夫なのか？」

「迅翔と一緒なら大丈夫だよ」

「いや・・・・・・・姫ちゃん、そう言う事じゃなくない？」

「案ずるな茜。何かあれば迅翔がどうにかする、って蒼影が言ってる・・・・・・・」

色々あった翌日の朝、目の前にはサイズの合っていない制服姿の蒼姫。

その隣には同じく制服の茜、俺の中には妖刀である蒼影。

・・・・・・・少し、昨日の夜の事を振り返ってみよう

◇◆◇◆◇◆◇

「家、直りましたよ」

四本の尻尾を出したあやめが言った。
桃色の二本は神力、金色の二本は妖力を表す尻尾らしい。
桃綺とやらは九本ずつあるそうだ。四本であれだけのもふもふ感がある尻尾が、知ってはいたが十八本！！　あのもふもふの！実に！
４．５倍！！　一本一もふに換算するともふもふもふもふもふもふもふもふもふもふもふもふもふもふもふもふもふもふ！！！！　．．
．．．．．．．．．．．．．．．おぞましい．．．．．．．

「．．．．．．どうかされましたか？」

「あ、ああ．．．．．．．．．ありがとう、助かった」

あやめの声でもふもふ地獄から脱した。
既に尻尾は消えており、右が桃色で左が金色の狐の耳もなくなっている。

それと神力だが、これは身体や物の再生を行うことが出来るらしい。
確かにそれなら茨木千夜の腕が一瞬で再生した事も頷ける。
・・・・・・最も、余りにも強大な妖力や魔力、あるいはそれらを纏った攻撃による傷の再生には相応の神力が必要らしい。例えば大妖怪の攻撃に込められた妖力が妖神の神力の絶対量を上回った場合、妖神はその攻撃が直撃した際の傷を完全に再生する事は出来ない。
つまり簡単な話、引き算と同じ原理である。先程の大妖怪の攻撃の妖力が１０、妖神の神力が５の場合、５に１０の負荷が掛かるから５－１０＝－５。よって妖神には５の、この場合は半分のダメージが通る。
まあ当然妖神も妖力を持つので、妖力を妖力で相殺する事も出来る。
さっきの例だと５－（１０－５）。上手く威力を相殺する事で神力の消費も抑える事が出来る。元妖怪だから神力より妖力の方が普通は大く、逆に神力の方が大きい場合は妖神では無く神になるらしい。
桃綺は半々の力を持ち、大別した際は神とのこと。

「迅翔、私は暫くお前の中で過ごす事にする」

「さっき言ってた事か？それで解決するなら・・・・・・ていうか出来るならな」

人間の姿だと妖力を隠しきれない、というのは余りにも致命的である。

茨木千夜などの到底勝てない妖神が来ようものなら文字通りジ・エンドだ。
別に疚しいことなどは何も無いので困ることも無い。
一番問題なのはそれが可能かだが・・・・・・　最強の妖刀なら可能なのだろう。

「解決する。間違い無くな」

「ッ！！　・・・・・・・・・・　先に言ってからやってくれよ」

蒼影が創り出した蒼い刃に刺され、痛みとは違う妙な感覚が全身に駆け巡る。
そして次の瞬間には、今まで目の前にいたはずの蒼影が消えていた。

―　消えていない。お前の中に入っただけだ　―

それ自体が結構大事なんだが。

―　・・・・・・　何にせよ、これで奴らに見つかることはあるまい。
言い忘れていたが、私の能力は姫の妖力の遮断に使っている　―

じゃああの時も能力は未発動だったのか？

―　少なくとも私自身には使っていなかった　―

蒼影との会話？が止まらないので中断する。ちょっと黙っててくれ影。

「さっきのは天狗・・・・・・だったんだよな？」

「はい。天狗は現世に残った数少ない妖怪達です。
基本的には人間側に味方しています。人間に紛れて生活する者もいる程です。
・・・・・・・・・蒼影様の強力な妖力を鬼などの物だと間違えたのでしょう」

「・・・・・・・・・お兄ちゃん、大丈夫なの？」

「何が？」

「何がって・・・・・・・・蒼影よ蒼影！　お兄ちゃんの中に入ったんでしょ！！」

大丈夫も何も・・・・・・・　体が多少軽いぐらいか。
でも確かに心配にはなるだろう。何せ人の中に妖刀が入ったのだ。
・・・・・・・どうなんだ？

ー　体が軽く感じるのは私の妖力の影響で身体能力が上がっているせいだ。
　お前の体に負担が掛かる事は・・・・・・・　無いと言って良いだろう　ー

「案ずるな・・・・・・・　今喋っているのは私、蒼影だ。　ってやめろ影！」

「・・・・・・・・・もう良いわ」

茜が疲れた様子で言った。勝手に人の身体動かすなよ・・・・・・・

―　これぐらいしても平気だと言う事を伝えただけだ　―

「まあまあ茜さん・・・・・・　迅翔さん、私はこれで失礼します。今回の事を桃綺様に報告するのは早い方が良いと思いますので」

「ああ、十八尾なんかが味方してくれるなら心強いしな」

十八尾、桃綺。多分名字は白葉木。
元は国を騒がせた程の大妖怪であり、現在は当時の二倍の本数の尻尾を持つ十八尾。最早妖狐と言うカテゴリーに収まりきらない気もする。

―　桃綺は『神狐（しんこ）』という、一人一種族の珍しい奴だ。
私や蒼姫との親交もあった。蒼姫と一応戦える程の力も持っている。
そして迅翔の読み通り、フルネームは白葉木桃綺だ　―

つまり、頼もし過ぎる味方か。

―　・・・・・・・頼もしさには欠けるな、性格的に　―

え・・・・・・・？

「十八尾！　・・・・・・・九尾の二倍！？
・・・・・・・あやめさんの仕える神様がそんな強かったなんて思わなかったわ」

そういえばまだ茜には言ってなかったな・・・・・・
などと考えていたが、あやめさんの次の言葉は予想外のものだった。

「はい、何せ『六天幻』の一人ですから」

「・・・・・・『六天幻』？」

「何それ・・・・・・・？」

ここに来て初めて聞く名前だった。
もし、もしも、俺の嫌な予想通りなら・・・・・・・・・・

―　・・・・・・・迅翔、少し替われ　―

？・・・・・・・　分かった。

「・・・・・・・替わった、蒼影だ。私が説明しておく。
白葉木の巫女であるあやめは神社へ帰り、桃綺に状況を説明してお

け」

「ありがとうございます。では、お邪魔しました」

あやめは玄関で草履を履き、急いで出て行った。

・・・・・・・歴代の巫女達と比べてもあやめは特に期待出来そうだ。

―　・・・・・・・交換するとこっち側になるんだな　―

少しの間だ。説明が終われば返す。

「・・・・・『六天幻』と言うのは、妖神や神魔や神の中でも特に強大な六人の『守護者』と、それらの域にすら留まらぬ力を持った妖神と悪魔の二人の『天幻』の合計八人からなる、世界のパワーバランスを保つ為の組織だ。当然、蒼姫が力を失う以前は天幻の一人だった」

「でも・・・・・・なんでそんな組織を作る必要があったの？」

―　確かに。　そもそも、パワーバランスが崩れたらどうなるんだ？　―

「この世界は、霊、妖、魔、神の絶妙なパワーバランスで成り立っている。

妖魔が映世に移住したのは人間の霊力が急激に弱まった為だ。

・・・・・・・パワーバランスが大きく傾くと、理すらも歪んでいく。

そして、最終的には何者も生きていく事の出来ない混沌の世界へと化してしまう。
妖魔の創り出した映世は妖力と魔力からなる世界だ。そこに人間は必要無い。
だが、現世と映世は言わば平行世界（パラレルワールド）の関係にある。
映世が崩れれば現世も崩れる。どの道、六天幻の存在は必要不可欠だ」

「なるほどね・・・・・・・　で、桃綺っていう神様がその一人だと」

「そう言う事だ。迅翔と替わるぞ」

―　なあ、これってどうしてもお互い筒抜けなのか？　―

・・・・・・・分かった、普段は遮断しておこう。いつでも解除は出来る。

―　そりゃどうも。ていうか同時に切れるのは一つじゃなかったのか？　―

物体とそれ以外、もしくは同じものを二つ以上同時に切れぬだけだ。

・・・・・・・おお、替わっている。
どうやら本当に意思は遮断されたらしい。

『物体とそれ以外、もしくは同じものを二つ以上』同時に切れない、

か・・・・・・

今は良いが、今度詳しく聞く必要がありそうだ。

嫌な予想は、当たりとも外れとも言えなかった。

俺は六天幻とやらが『リーダー格の妖神や神魔の集まりで、今は裏切り者である蒼姫を捜し出す為に動いている』と予想していた。

どうやらその目的は無いらしいが、敵に回る可能性も充分ある。

少なくとも一人は味方に付いてくれるが、それでも敵は五人居る。

「・・・・・・茜、もう寝るか。風呂入って」

まだ八時だが、今日は色々な事がありすぎた。ただでさえ月曜日なのに。

「そうね・・・・・・もう疲れたわ。姫ちゃんは私が入れてあげとくから」

「ああ、頼む」

目をソファーの方へ向けると、ちょうど姫が起きた所だった。

あの騒ぎの中で寝ていられるとは・・・・・・　流石は元最強の妖神だ。

俺はいつも通り一番風呂に入り、続いて二人が入った。
姫がリビングで脱ぎだした時は上がった身体能力により反射的に止めた。
意思遮断が解除されて「危なかったな・・・・・・」と影に言われたが、その後風呂から下着（下のみ）で走って出て来たのは不可抗力である。
こちらから意思遮断を解除すると意思内の空間の様な蒼と黒の広い部屋を偶然発見し、そこで鼻血を噴いて倒れている影を発見したので蹴っておいた。

そして、大きな問題が発生した。

「明日、どうする？」

「どうするって言われても・・・・・・」

「迅翔のこーこーに付いてく！！」

俺と茜は約一時間悩んだ結果、高校の友人を頼ることにした

０６：『最初の夜』Ｉ（後書き）

感想等よろしくお願いします。

０７：『最初の夜』ＩＩ（前書き）

どうも鍔姫水霧です。

今回はさりげなく文章量が過去最大だったりします。
それと全体的に会話の割合が増えていますね。
会話文とそれに対するキャラの考えなどの文の割合は非常に難しいです。
そのキャラクターの個性が表れる部分だと思うので、いつも悩んでます。

０７：『最初の夜』ＩＩ

黒永邸

高校に入ってから最初に出来た友人が住んでいる、白黒の洋館。
住人は我が友人であるここのお嬢様、そしてその執事、メイドなどらしい。
学校には執事と二人で来ており、実は俺はその二人しか知らない。

・・・・・・・と、言うことで、今は黒永邸の扉の前である。
目的はただ一つ、姫が着られる制服を貸してもらうこと。
何せお嬢様は服が大好きであり、様々な服を蒐集している。
きっとこの身長（１４０ｃｍ無いぐらい）に合うサイズの物もあるはずだ。

コンコンッと扉をノックし、扉が開くのを待つ。
すると案の定、燕尾服を身に纏った細長い体系の執事が扉を開いた。

「・・・・・・・これは迅翔さん、お嬢様に御用でしょうか？」

執事、蜉蝣（かげろう）シラハは、いつも通り落ち着いた口調で言った。

「ああ。いきなり来たけど、大丈夫か？」

「ええ、宜しければ上がって下さい。客間へどうぞ」

「ありがとう。お邪魔しまーす」

「・・・・・・えっと、お邪魔します」

「おじゃましまーす！」

シラハは俺と茜と姫が入ったのを確認すると扉を閉め、蝋燭の照らすチェス盤の様な白黒の廊下を奥へと歩いて行った。俺達は廊下の左側にあるドアの無い部屋に入った。黒い床に白い椅子と机が綺麗に並べられた、黒永邸の客間である。

「・・・・・・何か、落ち着けないわ」

「まあ、あいつの趣味だからな」

「あいつ？」

「ここのお嬢様で、お兄ちゃんの友達のことよ」

並べられた椅子に右から俺、姫、茜が座った。
・・・・・・ちょこん、という擬声語は誰が考えたのだろう？　天才だと思う。

暫く待っていると、ゴスロリを身に纏った我が友人が部屋に入ってきた。
黒永邸の幼き主、白黒嬢こと天楼門（てんろうもん）アリスである。

「いらっしゃい、迅翔、茜ちゃん　・・・・・・その女の子は？」

「それが、信じられない話だとは思うんだが・・・・・・・」

俺は何度も行った説明を、もう一度だけアリスにする事にした。

◇◆◇◆◇◆◇

「・・・・・・そう。蒼影、ここでなら出て来ても大丈夫よ」

「助かった・・・・・・・まさか迅翔の言う友人がアリスだったとはな」

影が座っている俺の右側に姿を現した。

・・・・・・・・・全く話が掴めない。茜も困惑している。姫はと言うと・・・・・・・

「アリス、影と知り合いなの？」

などと、呑気に話している。

いや、そう言う事か！？　にわかには信じがたいが・・・・・・・

「アリス・・・・・・・　お前、妖神なのか？」

「半吸血鬼で真祖・・・・・・・・　神魔よ。今まで黙っていてごめんなさい。
でも、脆弱な貴方を混乱させない為には、話す訳にはいかなかったのよ」

夜の王、吸血鬼。その中でも最高級の力を持つと言われる真祖！！
半分は人間でありながらそこまでの力を・・・・・・・・

「混乱させない為、か。余程迅翔を大事に思っているように見えるな」

「なっ・・・・・・」

「ちょっと蒼影！！　は・・・・迅翔・・・・・・・　勘違いしないで頂戴！？」

・・・・・・なんだこれは

「勘違い？　私がアリスの感情も見抜けないと思うか？」

「蒼影・・・・・・・　蒼姫に『アレ』、言って良いのかしら・・・・・・・？」

「くっ・・・・・・・・・」

睨み合い対峙するアリスと影・・・・・・・・・　もう好きにしてくれ

「・・・・・・姫ちゃん、聞かなくて良いのよ」

「アリスッ！『アレ』って何？」

茜の言うことなど聞きもせず、アリスの言う『アレ』に目を輝かせる姫。

何の事だか・・・・・・・・・　珍しく影が動揺したので聞いてみたい気もするが。

「うふふふ・・・・・・・・・　『アレ』って言うのはね・・・・・・・・・」

「なになにっ？」

「止めろ！止めてくれ！！」

「ふぅん・・・・・・・・・　あんな事を言わないなら、止めてあげてもいいわよ？」

「・・・・・・・・聞けないの・・・・・・・・・・・？」

「言わん・・・・・・・・言わないからそれだけは・・・・・・・・・」

アリスが満足そうに「分かったわ」と言うと、影はその場に崩れ落

ちた。
何だ聞けないのか、残念だ・・・・・・

「やっぱり面白いから言おうかしら」

「おい！！」

「やった！！」

「百年前の話だけど、蒼影が蒼姫と私を間違っんむ・・・・・・
何すんのよ！！」

影の手が神速でアリスの口を塞いだ。
アリスが振り払った際に影の手が引っ掛かり、アリスの左目の眼帯が外れた。

「・・・・・・・・・！！」

「なっ・・・・・・・・！？」

「え？」

同時にアリスの背中から蝙蝠のそれに似た漆黒の、巨大な左翼が現れた。

白い髪も、左半分は光を映さない様な漆黒に染まった。
隠れていた左眼は真紅で、まるで鮮血を圧し固めた様にも見える。
そして物凄い・・・・・・・おそらくは魔力、これと神力が発散している。

銀の十字架が打ち付けられた眼帯は、この力を封じていたらしい。

「・・・・・・菱えたわ。で、本題は？　蒼姫の制服とかかしら？」

眼帯の紐を結び直しながら、アリスが何気なく言った。
半吸血鬼である為か右の無い隻翼は、眼帯を着けるのと同時に霧散した。
同様に、髪の漆黒に染まっていた部分も光に溶けるようにして白に戻った。
茨木千夜以来の強大な力も収まり、代わりに人間の力、霊力が感じられる。

「何で分かったんだ・・・・・・？」

「現世で人と暮らすのよ、容姿から考えれば必要なのは制服でしょう。
いくらでも用意出来るけれど、小学校には必要無いんじゃないのかしら？」

「それがな・・・・・・」

復活した影が言うと、眼帯を外されたのを根に持ったアリスが影を睨んだ。
さっきの様子からしても眼帯を着け直すのにはかなりの霊力が必要な様子。
それに加えて魔力と神力も左眼に封じていたので、疲労も溜まるだろう。
・・・・・・・ いや、確かに影も悪いが、制服が必要なのは事実である。

「わたし、迅翔と高校に行くの！！」

なんて言ってるからな・・・・・・

「・・・・・・・・ 無茶があるわよね？」

ごもっとも。だが、影の口調で言うと、アリスも姫の事は言えんぞ。
あり得る範囲で最大に盛っても茜と同じ中学二年生程度が限界だ。

「まあ確かにな。でもアリスだって人の事言えないと思うぞ」

「アリス先輩、私よりもっと下に見えますよ」

「茜ちゃん・・・・・・・ 分かってるわ、どうせ私なんてロリババ

アよ・・・・・・・・」

「案ずるなアリス、姫はもっとロリでもっとババアだ」

「わたし、ろりばばあなの・・・・・・・？」

ロリババアという雰囲気は微塵も無いので二人共気にする必要は無いだろう。

・・・・・・・それより、会話の軌道を修正しないと不味い。多分十時は回ってる。

「それよりアリス、制服は貸してくれるか？」

「・・・・・・・・良いわよ。好きにして頂戴。

貴方達が言い出したんだから、言い訳ぐらいは自分で考えなさいよね」

「・・・・・・・そうか・・・・・・・・」

・・・・・・・忘れていた。

転校生になりきる為に、転校の理由は必要最低限のものだ。

「言い訳・・・・・・・　考えてなかったわ」

「ふむ・・・・・・・　私は迅翔の中に居れば良いのだが、姫は生身か・・・・・・・・」

「う～・・・・・・・・」

「はぁ、誰も考えてないのね・・・・・・・無計画にも程があるわ」

二人も考えていなかったらしく、姫には期待していなかった。
アリスは半ば予想していたのだろう、呆れた様子で額に手を当てている。

・・・・・・不味い。それもかなり、だ。
俺の通う蒼紀学園は転入の場合に限り、成績がある程度良ければ入学出来る。
それでも当然履歴書を見せる必要はある。持ってない。

「・・・・・・いっそ校長に事実を話して」

「無理に決まってるじゃない・・・・・・」

「むー・・・・・・・・」

「やはり根本的に無理があるのだろう」

「「「「うーん・・・・・・」」」」

駄目だ、良い案が浮かばない。
・・・・・・影の言う通り、最初から無理があったのだ。

「・・・・・・諦めるか」

「そうね・・・・・・・」

「ぬー・・・・・・・・・」

「・・・・・・・そうだな」

・・・・・・二人も諦めているし、姫にも少し我慢してもらうしか無いだろう。

「・・・・・・お邪魔しました」

「んー・・・・・・・　おじゃましました・・・・・・」

「・・・・・・こんな時間に悪かった、邪魔した」

二人は立ち上がり、影はそのまま歩いて部屋から出て行った。
残ったのは俺とアリスの二人のみだ。

「じゃあ俺も・・・・・・」

「待って！」

これ以上居座る訳にもいかないので、俺も帰る事にした。
しかし立ち上がろうとした瞬間、先に立ち上がったアリスに呼び止められた。

「・・・・・・・・ちょっと待ってなさい」

「え？　あ、ああ・・・・・・」

アリスは客間を出ると、そこから左に歩いて行った。

◇◆◇◆◇◆◇

黒永邸敷地門付近、感知無効結界最端部分。
ここから外に出ない限り、妖力や魔力などが感知される事は無い。

・・・・・・・・迅翔は何をしているのか？
帰る際は迅翔の中に居なければ、折角ここまで隠せていた妖力が感知される。
奴はその事の重大さが理解出来ていないのだ。天地ほどの違がある事を。

「お兄ちゃん、遅いわね」

「・・・・・・はやとぉー・・・・・・・・」

「・・・・・・・・戻るか」

後ろに振り返り、再び扉へ向かう。
しかし扉へ向かう途中、懐かしい友人に逢う事になった。

「・・・・・・・あら、蒼影」

「・・・・・・・・・夜子か。久し振りだ」

後ろから話し掛けられ振り返ると、紅いロングヘアーの少女がいた。
紅髪黒眼の魔女、文重夜子(ふみえよるこ)である。

「えっと・・・・・・・どちら様？」

「・・・・・・・・・だれ・・・・・・・」

「文重夜子、魔女だ」

簡単に紹介した。二人は知らなくても致し方在るまい。
姫は記憶を無くしているし、茜に至っては今回が初対面なのだ。

「蒼姫・・・・・・・・と、その子は誰？」

「・・・・・・・霧貴茜。初めまして」

「・・・・・・・・・ふん。
テラスがあるわ。そこで少し事情を説明して」

迅翔は・・・・・・・分かりやすい場所なので気付くだろう。

「ふんって・・・・・・」と茜が言ってるが、夜子は基本的に無愛想なのだ。
付き合い慣れると知的で面白い奴だが、最初はこの反応が一般的である。
姫は迅翔分不足で元気が無い。・・・・・・ 暗い会話になりそうだ。

◇◆◇◆◇◆◇

暫くするとアリスが戻って来た。その手には蒼紀学園の制服が・・・・・・。

「・・・・・・いや、ありがたいけど・・・・・・・・・」

「一応よ。制服だけでも持ってるに越したことは無いわ」

「でも、なぁ・・・・・・」

「良いから、持ってなさいよ！！」

と言われても、今回は時間で解決する事でも努力で解決する事でも無いのだ。
助けようとしてくれているのは嬉しいが、やはり無意味な事である。

「・・・・・・蒼紀学園の校長とは親交があるわ・・・・・・・・」

「え・・・・・・・！？」

初耳だ。それにしてもあの校長、吸血鬼とも交友関係があるとは・・・・・・・・
アリスを黒永邸当主と見てか吸血鬼の真祖と見てかは分からないが。
いや、今の問題はそんな事では無い・・・・・・・・

「・・・・・・貴方がどうしてもって言うなら、私から頼み込んであげるわ。

仕方無くだからね！　・・・・・・・・・・勘違いしないで頂戴！！
仕方無く、よ！！」

「アリス・・・・・・・・・」

仕方無くでも非常に助かった。
制服を貸してもらう筈だったのに、ここまでしてもらって良いのだろうか？
・・・・・・・いや、わざわざそれを聞くのは無粋、か。

「ありがとう、助かった！！　・・・・・・じゃあまた明日、学校で！！」

俺はアリスの手から制服を取り、茜達に追い付くために走って邸を出た。

アリスの微笑が聞こえた様な気もしたが、アリスに限ってそれは無いだろう。

◇◆◇◆◇◆◇

「迅翔、遅いぞ」

「お兄ちゃん遅い・・・・・・・　って、その制服は？」

「悪い悪い・・・・・・・家で説明する。　姫、高校行けるぞ！！」

「ほんと・・・・・・・！？　やった！！」

黒永邸の敷地の門の前で、三人に追い付いた。細かい事は後である。

「・・・・・・アリスか？」

「ああ。全部アリスのお陰だ」

本当に感謝しなくては。あちらは苦々しく思いながらかもしれない。

「アリス先輩、やっぱただ者じゃ無いわ・・・・・・」

「吸血鬼っていう時点でただ者じゃ無いしね～」

姫もすっかり元気を取り戻したようだ。

やはり友人は頼れる存在だ。・・・・・・ 俺も頼られる側でありたいものだな。

三人で話しながら、偶に影に乗っ取られながら、四人で家に帰った。

新しい世界は漸く、長い永い最初の夜を終えた

０７：『最初の夜』ＩＩ（後書き）

シラハとアリスは二人共白髪（はくはつ）です。しらがと言うと怒ります。

そして来ました二つ名！！

今回は文重夜子の『紅髪黒目の魔女』が登場しました。

アリスやシラハの二つ名は今後登場します。考えてない訳では無いです。

ちなみに『白黒嬢』は学校でのあだ名であり、二つ名ではありません。

感想等よろしくお願いします。

０８：『幻映の転校生』（前書き）

どうも鍔姫水霧です。
頭が痛いのですが、何故か更新速度が上がっています。

08：『幻映の転校生』

「アリスから事情は聞きました。蒼姫の転入を認めます」

「・・・・・・ありがとうございます」

「ありがとうございますっ！！」

蒼紀学園・学園長室・・・・・・

どうみても二十代にしか見えない校長、蓬莱寺咲耶（ほうらいじ さくや）。
彼女はアリスの旧友（百単位で）らしい。つまり、また人外発見である。

ちなみに、姫は俺の従妹という事になったらしい。
つまりはフルネームで『霧貴蒼姫』になる。結婚したみたいだな・・・・・

「あの、学園ちょ「咲耶さんで良いですよ」・・・・・咲耶さんは、何者ですか？」

「ほーらい・・・・・・　さくや・・・・・・・？」

「本名は『木花咲耶姫（このはなさくやひめ）』と言う、神です」

木花咲耶姫・・・・・・　富士山に住んでいる、火を鎮める女神だったはずだ。

竹取物語では不死の薬を富士山で焼いたという話がある。蓬莱はそこからか。

『蓬莱の玉の枝を持ってこい』って言う難題もあったし。

―　お前にしては鋭いな　―

いきなり出て来るな心臓に悪い・・・・・・

「・・・・・・早くお行きなさい。ホームルームに遅れますよ？」

「あ！！　っ失礼しました！」

「失礼しましたー！！　ありがとう咲耶さーん！！」

・・・・・・取り敢えず、これで大丈夫だ。

本当に遅れそうだが普通に行けば間に合うだろう。

「って姫！　廊下走るな！！」

「迅翔っ、遅いよ！！」

美少女に振り回される。全然楽しく無い。俺はラノベの主人公では無いのだ。

それに姫の行く場所は待合室だ。そこから担任と一緒に来る事になっている。

・・・・・・今日から全力で躾(しつけ)る事にしよう。

「全く・・・・・・・　桃綺もアリスも、何を考えているのでしょうね・・・・・・・・・」

◇◆◇◆◇◆◇

「おい迅翔、今日から担任代わるらしいぜ？」

「まじか」

それは初耳である。そう言えば少し前から鬱で引き籠もっていた。若い新米教師で陰の努力家だったらしい。そこが災いしたのかも知れない。

前の席のこいつは藤原裁見（ふじわら たつみ）、紛れもない一般人である。

顔が良く頭も良く努力嫌いで隠れオタクだが断固として人外では無い。

良く考えれば、俺の周りはこいつ以外殆ど人外である事が昨日判明した。

「それと転入生も来るんだってさ」

「ああ知ってる」

「マジか・・・・・・　転入生が二人ってのもか？」

「・・・・・・二人？」

「おうよ。しかも片方はロリっ子、もう片方は美少女らしいな」

「ほうほう」

「新担任も超美人って噂でよぉ・・・・・・　俺の中で新世界が始まるぜ！！」

「俺は昨日から始まってるけどな・・・・・・・・」

「ロリっ子～♪　・・・・・・ん、何か言ったか？」

「何でも無い。時間だ、席着け」

「そうだな。いや席ここだけども」

午前八時零分。ＨＲ開始の時間だ。
鐘が鳴るのとほぼ同時に、教室の前側のドアは開かれた。

「お早う。初めまして、新担任の白葉木桃綺です。よろしくね～」

「「ウエーイ！！！！」」

独特なアシメの、桃と金の長髪をたなびかせる絶世の美女。
男子生徒全員が大興奮する中、目を点にする例外が一人。
そう、霧貴迅翔だ。更に言えば俺である。

超展開　予想裏切る　十八尾（季語無し）

「続いて転入生が二人来てるので、どーぞ入って」

人の思考停止を無視して話を進めるな桃金アシメ！！
・・・・・・・開かれたドアから先に入って来たのはロリっ子こと姫
である。
そしてその次に入って来たのは案の定、見慣れない制服姿のあやめ
だった。

「・・・・・・・きっ霧貴蒼姫です！　よろしくおねがいしますっ！！」

「「もっ・・・・・・・萌え～！！」」

「「キャーカワイイー！！」」

前者が男子、後者が女子の反応である。
意思空間（思界（しかい）と名付けた）でドヤ顔の影を蹴った。

「白葉木あやめです。分からないことも多いですが、仲良くして下さい」

「「うっヒョぉイ！！」」

「「よろしくあやめちゃーん！！」」

姫と同じく。
やはり二人は相当に綺麗な、俗に言う『かわいい』顔らしい。
姫は兎も角、迂闊にあやめとの関係を話すと嫉妬で殺されそうである。
アリスファンクラブ隊長にタイマン張らされたのの二の舞は御免だ。
まあそうなれば人間を越えた身体能力でワンパンＫＯにするだけだが、盛り上がり具合もアリスの時の方が大きかったので心配無いだろう。

「・・・・・・三人共、ただの人間じゃ無いじゃない・・・・・・・・・・特に担任」

「ああ、このクラスに人外五人か・・・・・・」

小声で言ってきたアリスに、更に小声で返した。
今まで普通に通っていた教室がとんでもない妖魔の巣窟と化している・・・・・・・・・
まあ隣にゴスロリと執事が居る時点で以前も普通では無かったが。

「・・・・・・じゃ蒼姫ちゃんは彼の隣、あやめは迅翔君の後ろの席ね」

「はーい！」

「分かりました」

結果。
姫は俺の右前、あやめは俺の後ろになった。一年固定席である。
元々アリスは俺の右隣、その後ろにシラハ、俺は窓側後方一番目の席だ。
あやめの転入で窓側後方二番目となり、自称ハ〇ヒオタクの視線が痛い。

・・・・・・・なんて事も無いのだが。取り敢えずそうだとは言っておく。

この日は姫の飲み込みの早さ、あやめの適応力の高さ、そしてアリスや裁見の説明の分かりやすさやクラスメートの協力も相まって、無事に授業を終えた。

◇◆◇◆◇◆◇

下校時刻。
残念ながらアリスとは逆方向である。

「じゃあなー！」
「じゃあねー！！」
「また明日ー！」
「・・・・・・全く、貴方の隣は疲れるわ。行くわよシラハ」
「はい」

疲れる、か・・・・・・・　迷惑掛けすぎだな俺。
・・・・・・・登下校時に太陽光を浴びているが、大丈夫なのだろうか？

―　アリスは真祖、その上半分は人間だ。弱点は無い　―
でも十字架の眼帯は効果があっただろ。

―　あれは銀と十字架、つまり吸血鬼の弱点を二つ併せ持った眼帯だ。
　邪眼などが存在する通り、瞳は特殊でな。封印するには最適な部位なのだ。

しかもアリスに至っては左眼のみ吸血鬼の紅い瞳だ。
僅かばかりだが効力を持たせた眼帯でなら、左眼に力を封印出来る　―

へぇ・・・・・・　色々あるんだな。

「裁見、今日はありがと」

「いやいや・・・・・・　どーいたしまして」

そして驚いた。今日は授業中、裁見が姫に勉強を教えていたのだ。
いつもは寝ていてやる気の無い奴だが、無駄に基本スペックがかなり高い。
大抵の事は少し練習すれば出来てしまうチート型野郎である。
そのせいか『裁見様を陰から見つめる会』なる物が当学園には存在する。
『白黒嬢・天楼門アリスに踏んで欲しい会』という似たような物もあるが、おそらく奴らをアリスが踏みつける事は永劫在りはしないだろう。アリスの性格とシラハの存在から考えても。

・・・・・・　話が逸れたが、つまり俺の周りは変人ばっかだと言うことだ。
そして裁見がオタクである事は隠さないと不味いのである。

「・・・・・・　俺はあっちだ。じゃあな迅翔、蒼姫」

「ああ。また明日」

「うん、じゃあね裁見！」

割と裁見の家は俺の家と方向が違う。
学校を出てアリスと別れ、少し歩くと裁見と別れる。
後ろから尾行（笑）してた奴らは同時に消えるので、本当に一人なのである。

しかし、今日からは姫が居る。帰りに暇な事は無くなるのだ。
神社には普段は寄るつもりだが、今日は二人共居残りらしいので普通に帰る。
確か校長（神）と話があるとか言っていた。何の話だか。

「ねー迅翔」

「ん？」

「アイスクリームって、おいしいの？」

「あ、ああ・・・・・・　美味しいぞ。食ってくか？」

「うん！！」

季節外れのアイスクリームだが、たまには悪くない。
俺は道路のすぐ脇にあったアイス店に入り、アイスを二つ買った。

少しの間だけ、俺はこのいたいけな少女が妖神である事を忘れていた。

俺は後になって、これを『忘れたかった』のだと解釈した

０８：『幻映の転校生』（後書き）

突然ですが、この連休でロリ鬼を描いてみました。
おそらく今後登場します。伊吹詩妖理です。
伊吹は酒呑童子の幼い時の名字ですから、つまりはそういう事です。

ｈｔｔｐ：／／３４７６．ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／ｉ３２６９４／
みてみんです。

感想等よろしくお願いします。

０９：『天狗』（前書き）

どうも鍔姫水霧です。

ＭＨＰ３ｒｄ　ＨＤ　Ｖｅｒ．を一人でプレイしている今日この頃。

自分でも暇人だなぁと思います（笑）

09：『天狗』

「こんにちわー！！」

「・・・・・・家間違えた」

「迅翔、間違えてないよ？」

霧貴家玄関前。学校から帰ってきた所である。
自分でも、質素でありながらなかなかに綺麗な家だと思う。
そんな我が家だが、背中に黒い翼の生えた少女が来ることは無い。
腰から沢山尻尾が生えた巫女さんなら来る事はあるが。

「天狗、この家に何の用だ？　返事次第では・・・・・・斬るぞ」

天狗？　ああ成る程。これが有名な鴉天狗と言う奴か。

それはさて置き、まじで勝手に喋るの止めろ。

―　私が喋る必要が無ければ喋らん　―

頼むから思界(こっち)で言ってくれ・・・・・・

「はうぅ・・・・・・　戦いに来た訳じゃ無いです～・・・・・・」

―　ならば何をしに来た？　―

「なら、何をしに来たんだ？」

「うん・・・・・・　何しにきたの？」

「あのですね・・・・・・　昨日のお詫びも兼ねて、自己紹介を」

自己紹介？　・・・・・・・どういう事だ？　それに昨日のお詫びって・・・・・・・

「・・・・・・あ！！　昨日屋根吹き飛ばしたのお前か！？」

「すみません・・・・・・・　妖力を感じたんですけど、結局私の勘違いでした。

・・・・・・・いやぁー確かにあった筈なんだけどな～・・・・・・・・・」

いや、確かに勘違いでは無い。ただ・・・・・・

「・・・・・・人の家の屋根吹き飛ばしといて、勘違い？
いや確かに簡単に直ったし騒ぎにもならなかったけど、危ないだろ！！
もし、誰かが下敷きにでもなったらどう責任取るんだ？」

「・・・・・・・・・？」

そうだ姫は知らなかった。後で説明しよう。

「うぅ・・・・・・　でもちゃんと考えて吹き飛ばし」

「もし、だ！！　・・・・・・・・・まあ、今回は許す。
で、自己紹介とやらは？」

自己紹介・・・・・・・　おそらく「〇〇〇〇、鴉天狗です！」だろう。
・・・・・・・よく見ると足が半透明で、踝辺りで完全に消えているのだが。

ー　こいつ・・・・・・・　迅翔、敵ではない　ー

いやそれは今までの会話で分かってた。

「鞍馬水月（くらま みづき）。・・・・・・・何って言うんですかねぇ。
種族は天狗なんですけど千年前ぐらいに死んじゃいまして・・・・・・・・
人々から信仰されてたんで、亡霊と神霊のハーフみたいな・・・・・・？
・・・・・・・いや、天狗、亡霊、神霊の順で2：1：1ぐらいかな？」

「・・・・・・天狗の、亡霊と神霊のハーフ？」

「2：1：1・・・・・・・にー、いち、いち・・・・・・・・・」

分かり辛い奴だ・・・・・・・　それに自分の死を怪我位にしか考えていない。
なにか呼びやすい名前っていうか名称は無いのか・・・・・・・

「ちなみに人は『神亡天狗霊（みぼうてんぐりょう）』と言うらしいです」

「先に言えよ！！」

「どっちみち分かりづらいよ・・・・・・・」

ごもっともである。種族名で漢字五文字、読み八文字（ょは入れないで）。
これなら普通に水月と呼んだ方が良い。どちらにせよそのつもりだ

が。

―　水月は天然だ。そしてこちらに敵意は無い。

・・・・・・・安心しろ、奇襲してきた天狗がこいつなら現世に敵の天狗は居ない　―

なら影も普通にしてて大丈夫なんじゃないのか？

―　そうだな・・・・・・・　現世で敵に成りうる妖怪は天狗のみだ。悪魔達で現世に残っているのも近くではアリス達しか居ない　―

「水月か、千五百年ぶりだな」

「・・・・・・何だ知り合いだったのかよ」

俺の外に出た影が言った。　・・・・・・ならば早く言って欲しい。

・・・・・・・いや、最初は影も警戒していた。分からなかったのか・・・・・・・・・？

確かに千五百年も会っていなかったのなら分からないだろう。

「影！？　何だ、懐かしい妖力だと思ってたら影ですか～・・・・・・」

「・・・・・・影、知り合いなの？」

「ああそうだ。それにしても・・・・・・　どういう事だ？」

「・・・・・・？」

どういう事だ、ってどういう事だろう？
俺には分からないので、話を聞くしかない。

「ああ・・・・・・　死んで神亡天狗霊になったとき、女になっちゃった」

「訳分からん・・・・・・　男が死んだら女になるのか？」

「いや分からないですけど兎に角、今は女なんですよぅ」

「意味不明だ！！性格は変わって無いようだが・・・・・・」

「私にも意味不明なんだから影にも意味不明に決まってますよ・・・・・」

「もういい。取り敢えず、本当に水月なんだな？」

「えぇはい。間違い無く鞍馬水月本人です！！」

・・・・・・・この一連のやり取りで、水月が敵では無いらしい事だけは分かった

◇◆◇◆◇◆◇

「いやいや迅翔さん・・・・・・・　あんたも呑みなよぅ・・・・・・・・・」

「いらない呑まない」

「水月さん呑み過ぎ」

「茜さん呑みなは～い！！」

「ううっんむ・・・・・・」

現在、我が家は一人の危険な呑兵衛により危険区域と化している。
しかも呑兵衛は自分の倉庫にある酒を召還してくるので余計に質が悪い。
結局家のスペースの問題で影は俺の中に戻っている為、俺は力づくで呑まされることは無い。しかし茜はやられてしまった。意識が無い。御陀仏・・・・・・

―　今回ばかりは本気で姫を守れ　―

いや、いつも言ってる事だからな・・・・・

「はい姫さんもぅ」

「おいしいの？」

「ええ勿論っぅ！！」

「ストォォォップ！！　好き放題するなら追い出すぞ！！」

呑兵衛は危険だ。大事な事なので二回言いました。
目にも留まらぬスピードで俺の口に酒を放り込んできた。
・・・・・・・喉が灼ける・・・・・・・・・　視界が霞む・・・・・・・・・

「フヒヒィ・・・・・・・・・　テキーラぶち込みましたよぅ・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・姫、逃げろ！」

「テキーラって何！！」

駄目だ・・・・・・・　姫はテキーラに興味津々だ。
このままでは抵抗せずにあの悪魔の液体を口に入れてしまう・・・・・・・・・

―　おい迅翔！！　死んでも止めろ！！！！！　―

んな事言われても・・・・・・・　足がふらついて歩けない・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　間に合わない。天狗のスピードを嘗めていた。

「んっんっ・・・・・・・・ぷはぁ」

「ウッヒョイ！！　イッキ行きましたよぉ！！」

ああ・・・・・・・・・　イッキ駄目、ゼッタイ。急性アル中で死んだらどうする！
・・・・・・・・息は乱れていない・・・・・・・・・が、目つきがおかしい。
半目でこちらを見てくる。・・・・・・・・アレだ、物凄い媚びた表情

だ。

―　・・・・・・・・・もうあとは任せた。死ぬなよ　―

っておい！！

「・・・・・・はやと・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・！！」

・・・・・・・・姫の小さい手が俺の頬を撫でた。

そのまま両手が俺の顔を押さえ、ゆっくりとその小さな顔が近付き・・・・・・・・

俺は初めてのキスを、あろうことか見た目１０歳程度の少女に奪わ

れた

０９：『天狗』（後書き）

未成年者の飲酒は法律で禁止されています。
テキーラ等アルコール度数の高い物の一気飲みも止めましょう。
アルコールの過剰摂取はガンや脳の萎縮に繋がります。
酒は百薬の長と言いますが、自分の為にも約束と節度を守って下さい。

感想等よろしくお願いします。

１０：『化け猫少女』（前書き）

どうも鍔姫水霧です。

何か、最高に痛い物が創りたいと思っています。

鉄を買ってきて十字剣とか（笑）　・・・・・・・・・自重

１０：『化け猫少女』

「迅翔・・・・・・　おい迅翔！！」

「あ、ああ・・・・・・・　何だ？」

「修行だ、人妖化して映世へ行くぞ」

「茜やあやめは誘わなくて良いのか？」

「茜は熟睡している、あやめには伝えてある」

「・・・・・・・そうか」

茜、水月、そして姫が雑魚寝している我が家のリビング。
もう十月後半、冷え込む時期になって来ている。俺はある事を切欠に１ｍｍも動けずソファーに座っていたが、水月の妖術で全員に毛布が掛かっていた。
そんな中俺に話し掛けてきたのは、唯一酒を飲んでいない影だった。

言い出すのが突然過ぎるが、確かに俺は強くならないと死んでしまう。
これほど嫌なことは無いだろうが、文句を言っても解決しない・・・・・・

ちなみに人妖化とは、影を取り込んで妖力を解放した状態の事である。

「修行なら・・・・・・　アリスにも協力して貰った方が良いんじゃないか？」

「あいつに頭は下げん。・・・・・・・ 鞘を出して抜刀しろ」

「分かってる」

左手元に鞘をイメージで出現させ、無い柄に右手を掛ける。
そして右手を強く握り刃渡り４０ｃｍ程度で抜刀、目の前の空間を斬った。

―　最低限の事以外は私が教えるまでも無いか　―

「いや出来れば教えてくれ」

ふざけた事を言いつつ、納刀しながら、目の前に開いた空間に入っていった。

姫が起きたら俺達が居ないことで不安にならないだろうか・・・・・・・

◇◆◇◆◇◆◇

久し振りに見る気がする、蒼い世界

実際は昨日の夜に見たのだと考えると嫌になる。

・・・・・・・・・あの時は姫もいたが。

―　・・・・・・雑念が多いな。

ここは映世、強力な妖魔達が跋扈する世界だ。油断は死を招くぞ

―

嫌な世界だ・・・・・・　そういえばあやめは居ないのだろうか？

―　映世と現世の時間軸の関係上、現世での１分がこちらでは１０分になる。

仮にあやめが私達の６分後に映世入りするとすれば・・・・・・

―

１時間待ち、か。・・・・・・・なかなか厄介な差だ。

「・・・・・・妖怪なんかも居るしなッ！！」

居合い斬りを真後ろに振り返りながら放つ。

鉤爪を持った人影は空中で上に跳び、俺の後ろに着地した。

銀髪銀眼に銀のネコ耳と二本の尻尾を持つ、同い年位に見える少女である。

どうやら鉤爪に見えたのは長く延びた本物の爪だったようだ。

「妖力を持った人間・・・・・・　半人半妖？」

「似たようなもんだ」

言いながら納刀し、一瞬で抜刀。日本刀サイズから短めの物に替えた。
武器のリーチは相手より少し長いぐらいが一番やりやすいのである。
しかも鞘はすぐさま創り出せる上、鍔付近で出せば納刀時間も短縮出来る。
・・・・・・・茨木千夜の槍鎌は斬れなかった。切断能力は付属品みたいなものか。

―　お前が未だ発動出来ていないだけだ。雷の能力もな　―

雷の能力が発動出来ていない？　・・・・・・・いや、確かに使えていた。

―　あれは強力な能力の上澄みに過ぎん。
・・・・・・・まず、能力が発動出来ていればその『名』が解る筈だ　―

能力の『名』・・・・・・・？　『雷の能力』じゃ無いのか？
じゃあ影の能力の『名』は何なんだ？

―　私が教えても意味が無い。能力の名は自分で探すものだ。

お前自身が理解したその時、私は全てを斬り伏せる刃に成るだろう　―

よく分からないが、取り敢えずは漫画みたいな原理らしい。
これで二段階目の発動とか解放とかがあったら笑うしかないだろう。

―　お前にはまだ早すぎる話だ　―

・・・・・・・・・存在しているようである。

「あのさぁ・・・・・・・・・
相手が私だったから良いけど、鬼とかなら死んでるよ？」

「警戒はしてる。・・・・・・・・お前、敵意は無いのか？」

今まで待っていた事、その間の様子、爪も短くなっている事。
これらから考える限り、到底こちらを敵視しているように見えない。

―　最初に襲いかかって来ただろう　―

ああ、忘れていた・・・・・・・

「・・・・・・ごめんミスった、やっぱお前は斬る！！」

「ふぅん・・・・・・　別に敵意は無いけど、そういう事なら手加

減しないよ！！」

え？　『別に敵意は無いけど』・・・・・・・・・？

「あっ・・・・・　ちょっ・・・・・・・」

「シーッ・・・・・・・・・」

・・・・・・・嵌められた。誰にとは言わない。兎に角止めなければ・・・・・・・・・

「悪かった誤解だ！止めてくれ！！」

「みゃおー！！」

説得の試みも虚しく、ただ無慈悲にネコパンチは迫り来るのであった

◇◆◇◆◇◆◇

「くっ・・・・・・・」

「シッ!!」

爪による高速の連続攻撃を避け、または弾いていく・・・・・・・・・

既に脚には雷を纏っており、今の俺の最高速度である。

それでも反撃の隙は無く、体力と集中力だけが徐々に削られていく。

「・・・・・・『蒼雷砲』！！」

「っつ・・・・・・・」

とっさに思い付いた技・・・・・・　左手から雷を前方に撃ち出すだけの単純な技。
しかし、単純という事はそれだけ無駄無く、高い威力を発揮出来るのだ。

雷の軌道上にあった家々はほぼ消し飛び、地は抉れた。
それでも当然当たらなければ意味は無く・・・・・・・・

「ァアッ！！」

「はあぁッ！！」

結局は、また刀と爪で切り結ぶ事になった。

能力・・・・・・　使えれば打開策になるのだろう。
しかし現時点で使えないので、これに頼るのは危険過ぎる。
それにあちらが能力を使えないとも限らない以上、仮にこちらが発動出来たとしてもそれ以上の能力を発動してきたら終わりである。

「さっきからっ・・・・・・・　剣裁きが上達してるね」

「そりゃどうも・・・・・・・　そっちも速くなってるな」

話しているうちにも更に攻撃は加速してゆく・・・・・・

俺は両腕にも雷を纏い全力で応戦しているが、あちらは化け猫らしく更に俊敏な動きで俺の首を狙い、爪を銃弾の如き速さで突き出してくる。

爪のリーチは約４０ｃｍ・・・・・・・　妖刀と斬り合っても罅すら入らない強度。

五つ同時に当たる性質上威力が高く、直撃は絶対に避けないと死ぬ。

「速ッ・・・・・・・過ぎるだろ」

「この速度に付いて来るなんて・・・・・・・　一部の天狗ぐらいだってッ！！」

背後に気配を感じ、振り返って凪ぎ払う。

しかしそこに敵はおらず、代わりに視界がうっすらと暗くなった。

・・・・・・・・上か！！

そう気付いた瞬間、強大な妖力を纏った凶爪が振り降ろされた。

「『幻殺瞬影』！！」

「『雷羽葬刃』！！」

・・・・・・・・・咄嗟に出した技だった。

影に羽のような大きな雷を纏い、それで斬るだけの技。

しかし化け猫の爪は綺麗に折れ、俺は宙に浮いていた・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・！？」

「今のは・・・・・・・・・？」

そして、俺は直ぐに気付いた。

鳥のような雷の羽が、背中から四枚生えていたのだ。

「・・・・・・・・・・もういいよ、これ以上戦ったらどっちも只じゃ済まない」

「・・・・・・・そうだな」

化け猫少女との戦いは、あっさりと終わりを迎えた。
本気の殺し合いでは無かったのである。

・・・・・・俺は、死を見たく無い。例えそれが永年恨んだ敵だとしても・・・・・・・・

１０：『化け猫少女』（後書き）

感想等よろしくお願いします。

１１：『鮮血の吸血鬼』（前書き）

どうも鍔姫水霧です。

やはり二次創作とオリジナルではアクセス数の伸びが桁違いですね。

文字通りに桁が違うのでさすがに驚きました。

11：『鮮血の吸血鬼』

「『雷羽（らいば）』、か・・・・・・・　なかなか良い能力じゃん」

「羽が四枚っていう事に意味はあるのか・・・・・・・？」

「何言ってんの！だから格好良いんだよ！
二枚羽なんか有りがち過ぎるし、羽がいっぱいあるのは中二のロマン！！」

「うーん・・・・・・　そいつは小学生の時に来て、一昨年には去っていったんだ」

「他人に迷惑掛けなければいつまでも患っててていいじゃん？
四枚羽が少しも格好良く思えないなら、そんなつまらない人いないよ」

「・・・・・・・まあ、二枚だけよりはオリジナリティがあって良いかな。
ただ、慣れるまでは相当疲れるんだ。特に脳が」

「ああー・・・・・・・　そりゃ二枚よりは複雑だよ、普通に考えて」

「腕を六本同時に動かしてる感じだな。人妖化してないと無理」

「霊力の大きさの問題・・・・・・じゃあ無いよね。頭脳を借りないとって事？」

「その通り。一人で使えるようになるには、多分1ヶ月ぐらい必要だな」

「ありゃ、割と短いね」

「大事なのは慣れだろ、慣れ」

「そだね。私も慣れるまでは全然使えなかったよ」

「・・・・・そういえばお前の・・・・・うんお前の能力って何なんだ？　あと名前」

「雅銀華（みやびぎんか）。種族は猫又、つまり化け猫だよ。
能力は『幻葬風（げんそうふう）』・・・・・まあさっきの技名の元だね」

「俺は霧貴迅翔。その『幻葬風』ってどんな能力？」

「分かり易く言えば、高度な幻術と高速移動を可能にする能力・・・・・なんだけど、難しくてまだ完全には使いこなせてないんだよ・・・・・・・」

「名前が分かっても本当に使いこなせる訳では無いのか。
ていうか、銀華も大変だな・・・・・　俺のは身体能力上がるだけだし」

「そういうけど、私の経験から言えば迅翔みたいな能力が一番怖い

ね。
私と迅翔の能力が完成してから戦うとしたら、私は逃げるのが精一杯だよ」
「能力が完成する・・・・・・？　いや強さに段階があるとは思ってたけど」
「・・・・・・・一段階目が『発動』、二段階目が『解放』。能力解放が出来るのなんて、それこそ六天幻の八人とごく僅かしかいない」
「・・・・・・解放した時、能力の名前が変わったりするのか？」
「私の場合は『夢葬風迅（むそうふうじん）』になるよ。使えないけど」
「使えなくても名前は分かるのか・・・・・・・・」
「うんにゃ、普通分からないよ。私は解放出来る寸前だからね」
「ん？　解放出来るのってよっぽど強い奴だけじゃ・・・・・・？」
「・・・・・・・・はぁ。
気付かない方がおかしいよ。さっき私は能力を一度も使って無いからね？」
「・・・・・・でも、茨木千夜と戦った時は普通に圧されてた。
あいつがあの時能力を使ってたんなら納得いくが、そうじゃ無いはずだ」
「本当にまだ分からないの？

迅翔はそんじょそこらの妖神よりよっぽど強いんだよ！！」

「まじですか」

「まじです」

こんな感じで、結局銀華とは仲良くなった。

そして延々と話していたが、あやめはまだだろうか？

そろそろ来ても良いと思うのだが・・・・・・・・

◇◆◇◆◇◆◇

「『血架（ブラッディクロス）』！！」

「くっ・・・・・・・・・」

六本の尻尾で、四方から迫り来る鮮血の刃を受け流す。
凶刃は私のすぐ目の前でぶつかり合い、深紅の十字架を形成した。
その場所から一瞬で後方へ移動し、十字架から距離を取った。

「あやめ、本当にその程度の力で六天幻を相手取るつもりなのかしら？」

「足りないから・・・・・・　アリスさんに修行相手をしてもらっているんです！！」

『神邪這炎波』！！

地を這う様に相手に迫る、超高温・超巨大な炎の津波。
左翼を広げ半吸血鬼の力を解放したアリスさんにでも、ダメージは通る筈。

しかしアリスさんの能力『血夜（ナイトブラッド）』により弾かれた。

「私の操る血は、そう簡単には蒸発しないわよ」

「でも・・・・・・　操れる血の量はアリスさんの血の内の何割か、ですよね？」

「・・・・・・そうね。とても修行では使えないわ」

「修行では、と言うことは、本気なら血の量をも操るのですか！？」

この血液操作能力は、微量の血液でも相当に強力なのだ。
アリスさんを斬りつけても傷口が塞がれてしまうか、そこから攻撃が来る。
流石に私の身体の中の血までは操れないらしいが、私が傷を負って血が零れ出た場合はそれも操られてしまう。重い一撃の場合、そこから噴き出た大量の血液を操られるので絶対に躱さなければいけない。

こんな恐ろしい能力でもまだ本気では無い・・・・・・　解放を残しているのだろう。
これでも・・・・・・　これ程の力を持つアリスさんでも、六天幻では無いのか・・・・・・

「・・・・・・そうね、丁度良いわ。観ていなさい」

「え・・・・・・・　っ！？」

瞬間、まるで深い海の底にいるような感覚に捕らわれた。
その強大な妖力に、反射的に尻尾を八本出した。今はもう八本出せるのだ。
しかしまだ足りない。九本・・・・　九尾にはならなくては太刀打ちも出来ない。

アリスさんが納めたまま左手に持っていた漆黒の十字剣が、鞘から抜かれた。

「・・・・・・ぬらりひょん、ね？」

「いかにも・・・・・・　儂が最強の妖怪、ぬらりひょんだ」

・・・・・・・・ぬらりひょん！！
多くの逸話が存在し、その全てにおいて最も強大だとされる妖怪。
認識を操る能力で知られるが、本当に恐ろしいのは純粋な妖力の大きさだ。

「残念だけど貴方は時代遅れ。過去の栄光に縋る、ただのＤＱＮよ」

「小娘が・・・・・・　貴様に遅れをとる程、儂も老い耄れてはおらんぞ！！」

更に強大になった妖力を目の前にしても、アリスさんは動じない。
能力の発動すら出来ない私は、その姿に信頼と、ほんの少しの恐怖を感じた

◇◆◇◆◇◆◇

「！　凄い妖力・・・・・・・　それに魔力」

「・・・・・・・・・アリスか」

「知り合いなの？」

「片方はな。最近までただの友達だと思ってた、半吸血鬼だ」

しかし、まさかアリスまで映世入りしていたとは。

・・・・・・・他にはあやめの妖力と霊力、そしてもう一つ誰かの霊力。

「・・・・・・・行って確かめるしかないか」

「！？　馬鹿、絶対に私たちより強いって！！」

「介入するつもりは無い。嫌なら銀華はここに居ていいけどな」

「もう・・・・・・・　分かった、私も行くよ」

しかし・・・・・・・　この霊力は何だ？

おそらく俺と互角以上・・・・・・・　こんなに強い人間は初めてだ。

◇◆◇◆◇◆◇

「『血奏夜葬（ブラッド・オブ・ジ・ナイトメア）』・・・・・・・・・・・・」

「『陽炎幻月』！！」

アリスさんの背中に、鮮血の右翼が形成された。
通常なら有り得ない量の血は、抜刀と同時に鞘口から溢れ出た物だ。
髪は光を掻き消すような漆黒に染まり、黒かった右眼は紅く染まった。
刃のみが白銀の黒い十字剣は生き血を渇望している様にすら見え、
アリスさんが一振りしただけで周りの地面を粉々に砕き割った。
対するぬらりひょんは深蒼の妖力を身に纏っている。
そして彼自身が幻影になってしまったかの様に揺らめいている。

「この『ダーインスレイヴ』は、貴方の血を啜り尽くすまで止まらないわ」

「所詮は、武器に頼らねば何も出来ん小娘か」

ぬらりひょんの挑発に、アリスさんは至極冷静に対応した。

「今飛び込んでいれば、全方向からの攻撃を受けてたわね」

「ほう・・・・・・　口先だけのクソ生意気な雑魚悪魔では無いようだな」

「「今の挑発に乗っていたら終わっていた」なんて思っていたのかしら？」

「この程度なら当たっても問題無いと、突っ込んでくると思っていた」

・・・・・・・正直、ついて行けない。

おそらく六天幻クラスの者で無ければ介入出来ないだろう。

「『血架殲滅（ブラッディクロス・エクスターミネイション）』！！」

「『朧怨氷華』！！」

数え切れない程の血の十字架が一瞬で相手を串刺しにした。

しかし、認識をずらしていたぬらりひょんは妖術の氷の華で反撃す

る。
侵食する氷の華をアリスさんは叩き斬り、そのまま超高速で斬り込む。

「何！？」

「腰が引けてるわよ、自称最強（笑）の妖怪さん？」

完全にアリスさんの優勢だ。吸血鬼は圧倒的な身体能力を持つ。
対するぬらりひょんは氷の刀で応戦し、その剣術で圧倒し返した。

「何で今までやらなかったのかしら？」

「貴様の力量を、少々見誤っていた」

しかし身体能力ではアリスさんが上を行き、五分五分の斬り合いになった。
それを眺めていると、隣にいた男性がふと呟いた。

「どの道、お嬢様の勝利は確定事項です」

「シラハさん・・・・・・・　私も、なんとなくアリスさんが負けるとは思えません」

蜉蝣シラハ・・・・・・・　アリスさんの執事にして、映世を知る人間である。
シラハさんはナイフをしまい、後ろを見て言った。

「迅翔さんと・・・・・・・　妖怪？」

「変ですね・・・・・・・　ただ、迅翔さんなら妖怪をも仲間にしかねません」

タンッという音を立て、二つの人影がすぐ目の前に着地した。

「あやめ、と・・・・・・・　シラハ！？」

「・・・・・・・迅翔、知り合い？」

「迅翔さん・・・・・・　私はお嬢様の付き添いです」

「それより迅翔さん、その方はお知り合いですか？」

「・・・・・・どっちも知り合いだ。シラハは、分かった」

銀色の猫又・・・・・・　聞いたことのない妖怪だが、力は大きい。
「私は雅銀華、よろしく！」とフレンドリーに話しかけてきた。
それに、迅翔さんが連れてきたのだ。悪い妖怪ではないだろう。

そして迅翔さんは、アリスさんとぬらりひょんを見て言った。

「相性最悪、これは多分長期戦になるぞ。素人の意見だけど」

この意見通り、血と幻術を取り入れた斬り合いは永く続いた。

◇◆◇◆◇◆◇

決着は、アリスさんの普通の一撃によるものだった。
横一文字に、刀ごと両断したのである。

「ダーインスレイヴは、血を啜るほど強くなるわ」

彼女の言うとおり、白銀だった刃は真紅に染まっていた。

血を啜ることで強大になる吸血鬼、その中でもアリスさんはより吸血鬼だ。
半吸血鬼でありながら、並みの吸血鬼とは比べ物にならない。
そして彼女は迅翔さんを発見すると、そのままそちらへ走っていった。

「迅翔！　見てたんでしょう？　・・・・・・・ご褒美を頂戴」
「は？　・・・・・・・・え！？」

・・・・・・普段とは様子が違う。誰が見ても分かる程に。
普段なら、こんなに甘えた、媚びた声を出すことは絶対に無い。

「もう・・・・・・　けちね。なら私から！」
「？　っむ・・・・・・・　っ・・・・・・・・・・　ぷはッ・・・・・・・・！？」

・・・・・・・・はい夢ですね分かります。

私は右手に力を込め、快音が響くほどの威力で自分の頬を打った。

「ちょ・・・・・・あやめ！？　何してんの！？」

「おかしいですね・・・・・・・・　力が足りないのでしょうか」

更に力を込め二発、三発、四発・・・・・・・・

五発目が当たる寸前で、銀華さんに止められた。

「ほんとに何してんの！いや確かにビックリだけども・・・・・・」

「あれ・・・・・・　痛いですっ！！」

張り手四発分の痛みに襲われ、うずくまる私にシラハさんが言った。

「お嬢様は普段はツンデレですが、こうなると盛大にデレるんです」

「迅翔ーっ！」

「うっぷ・・・・・・　ちょっアリスっ・・・・・・・ん・・・・・・・・・・」

11：『鮮血の吸血鬼』（後書き）

反省も後悔もしていません。

感想等よろしくお願いします。

12：『休日』（前書き）

どうも鍔姫水霧です。

12：『休日』

家に帰ると、メールが届いていた。

姫と茜と水月は話をしていたようで、普通に「おかえり」と言ってきた。

水月は影の知り合いだけあって本格的に頭がおかしくは無いようである。

まだ少しボーっとしたままの頭でケータイを開き、内容を確認する。

ボーっの原因は今更言うまでも無いだろう。

差出人：（藤原裁見）

久し振りに普通の人間とやり取りする気がしなく無い。

件名：（明日暇だろ？）

・・・・・・・割と失礼な事言ってやがる。そういえば明日は創立記念日だ。

本文：（絵描きなう。まあそんな事はどうでも良いんだけど、明日アニメイド行こうず。服装はいつも通りだからそのつもりで来てくれ（´・ω・、））
アニメイドはアニメグッズや同人誌などを販売しているオタクショップである。
いつもならスイカブックスに行こうと誘われるのだが、まあ細かいことは気にしない。どうせ気分とかメイドにしか委託されてないとか言うのだろう。
・・・・・・・・・『いつも通りの服装』だと裁見だとバレる事は無いが、隣にいる俺まで巻き込まれるほど目立つので正直やめてほしい。まあそれでもバレるよりは数倍マシだからそうしているのだが。

「・・・・・・・・・姫、明日学校休みなんだけど」

「なに？」

「お留守番、出来るか？」

「うん・・・・・・・　迅翔が言うならがんばるよ！！」

姫には悪いが、裁見の人生を台無しにしないためだ。
家には茜もいるので大丈夫だろう。大丈夫な筈である。

「・・・・・・私？　悪いけど出掛ける予定が入ってるから無理よ」

「そうか・・・・・・　困ったな」

「私に任せなよ！」

「私も居ますよー」

「帰れ」

・・・・・・何故か付いて来た銀華と、夕方から居座っている水月。
たった一晩にして我が家は妖神の巣窟と化した。
ん？　ああ、よく考えたら一晩も経っていなかった。

銀華は兎も角、姫に酒を与えかねない水月は本気で帰って欲しい。
影曰わく「姫は少しでも酒を飲むと感情が制御出来なくなる」のだ。

「それは兎も角、迅翔」

「銀華？　何だ？」

「真面目に姫ちゃんの面倒見るから、炬燵出していい？」

「・・・・・・分かった。最近寒いしな。

隣の部屋の下から二番目の引き出しに炬燵布団が入ってるから」

「ありがとっ！」

俺も炬燵はそろそろ出そうとしていたところだ。
それに銀華は信用出来る。危ないのは・・・・・・・・・

「水月」

「はい？」

「絶対に！！　・・・・・・・姫に酒飲ますなよ」

「わたし？　・・・・・・・分かった飲まないよ！」

姫はいい子だ、また下校中にアイスを買ってあげることにしよう。

「分かってますよぅ・・・・・・・　銀華さん、呑みません？」

「私は下戸だよ。それに匂いで姫ちゃんやられるかもしれないし」

銀華ナイス、と、心の中で叫んだ。
呑兵衛はアルコール摂取量を法律で制限されてしまえばいいのだ。
・・・・・・・そろそろ眠い。風呂入って寝よう。

「茜、風呂入っ・・・・・・て、もう入ってたのか」
「ずっと前にね。お酒、残ってて気持ち悪かったから・・・・・・・・・」
「そうか。？　じゃあ誰が姫を風呂に入れるんだ・・・・・・・・？」

茜、姫、銀華、水月・・・・・・・　この部屋の一同の視線が、俺に集中した。
冗談じゃ無い。
俺は合法的にでも小学生にしか見えない少女の裸体を見たりはしない！
・・・・・・・・そしてこんな状況でなんだが、全員美人である。

「・・・・・・私が入れるよ。行こうか姫ちゃん」

「うん。・・・・・・・迅翔、今度いっしょに入ろうね！」

「・・・・・・・・・・」

銀華が救いの天使に見え、姫が天然にして凶悪な悪魔に見えた。

恥じらっているのを隠し切れていないせいで更にダメージが大きい。

・・・・・・とりあえず、もう少しで寝れる。

「迅翔さんは私と入りますかぁ？」

遅くなった原因の八割はこいつのせいだが。

◇◆◇◆◇◆◇

「よう」

「迅翔、おはよ」

藤原家の前で、出て来た金髪ツインテールと挨拶を交わす。
いつもと違い普通のワンピースと上着を着ている、藤原裁見である。
裁見はオタクショップやイベントに行く際、必ずゴスロリなどで女装する。

身長は１６２ｃｍと小柄であり、更に女のそれにしか聞こえない高い声で普通に会話することさえ可能。相変わらず無駄にスペックが高い。
撮影されるのは日常茶飯事で、アイドルにスカウトされた事もあるらしい。

「さあ迅翔、行こう」

「分かってるよ、零那さんよ。・・・・・・・・いつもと違うじゃないか」

「いやぁー・・・・・・・・流石に目立ち過ぎるじゃん？」

「前から思ってたけどな」

女装した際の偽名は矢宵零那（やよいれいな）、ハンドルネームである。
絵を描いてイベントにサークル参加したりする時もこれを使っている。
『性別変換能力』と自称しているが本当かは分からない。ていうか嘘だろう。

俺は無駄に完成度の高いオカマと、一日中オタクショップを回ったのだった。

◇◆◇◆◇◆◇

さて、格好付けて引き受けてしまったがどうしよう・・・・・・・・

姫ちゃんと水月とは昨晩知り合ったばかりだし、現世は全くと言って良いほど知らない世界なのだ。古参の元妖怪の妖神なら、約千年前の、分離する以前の現世ぐらいは知っているだろう。しかし私は生まれてから百年も経っていない。時間の流れの遅い現世からすれ

ば、ほぼ十年前に生まれたことになる。

当然その間に現世を訪れる事は無く、どころか現世の存在すら最近まで知らなかった。映世の空は妖力の蒼か魔力の紅に染まっているのが常識だったが、人間の世界である現世には様々な色が混沌と存在している。

だからだろうか？　この世界、そして迅翔に興味を持ったのは・・・・・・・・

「・・・・・・さて、茜も出掛けちゃったし、どこか行く？」

「むーん・・・・・・・・・」

「姫さんの力でも取り戻しますかねぇ」

姫ちゃんの力・・・・・・・　天幻の力だ。

迅翔達からは一割以下しか使えなくされてると聞いている。

私も自分の力に自信はあるし、だからこそこちら側に付いている。

しかし六天幻の守護者六人・・・・・・・　桃綺を抜いて五人と、天

幻一人が敵だ。
守護者一人と守護者に近い力を持つアリスが味方でも圧倒的不利は覆らない。
人間である迅翔は急速に成長するだろうが、それでも無理がある。
姫ちゃんが力を取り戻せば、こちらの勝利は確定する。
力を封じられた戦いの時も五人相手に互角に戦った、名実共に最強の妖神だ。
尤も、その時もう一人の天幻は行方不明で戦っていなかったらしいが。

「それが・・・・・・・・・　出来るの？」

「・・・・・・・・・水月お願い！　わたし、みんなを守りたい！！昔のことなんておぼえてないけど、迅翔達に守られるだけじゃ嫌なの！！」

・・・・・・・・・姫ちゃんの声は、今まで聞いた事の無い程に真剣だった。
理屈抜きでみんなを守りたい・・・・・・・・・
そんな姫ちゃんの表情は、何となく迅翔と似ていた。

「当然、全てを取り戻すには長い時間が掛かるでしょう。
ただ少しだけなら一日で取り戻せます・・・・・・・・・　戦いの感覚です。
感覚を取り戻すことで力そのものも戻りやすくなる事は間違いありません」

「・・・・・・協力するよ」

「何でもする！」

私と姫ちゃんの言葉を聞くと、水月は頷いて言った。

「・・・・・・・・では、まずは白葉木神社へ行きましょう」

文字通り長い一日は、こうして始まった

12：『休日』（後書き）

裁見「女装の基本は恥を捨てる事だよ」
迅翔「チートめ．．．．．．」

裁見は基本チートです。ですがどこまでも人間です。

感想等よろしくお願いします。

１３：『憂鬱の吸血鬼』（前書き）

どうも鍔姫水霧です。頭痛いです（切実

１３：『憂鬱の吸血鬼』

まだ頭がボーっとしている・・・・・・・

ボーっの原因は私なのだが・・・・・　認めたくない。

いや確かに私だが、完全に吸血鬼化した際の私は最早私ではない。髪は完全なる漆黒に染まり、両目は鮮血の様な深紅に変わる。しかし性格や言葉使いや記憶や感覚等、人格は変わらないのだ。ただあの状態で迅翔の事を考えると、普段は胸が締め付けられて煩わしいだけなのに、何故かとても愛おしく思えてしまう。

弱くて強がりでお節介で、人間のくせに自分を第一に考えない愚か者。

私は間違えてでもそういう人間、迅翔の事を良いと思った事は無い。ただ、彼が喜んでいると何となく嬉しかったり、彼が怒っているとその対象が気に入らなかったり、彼が哀しんでいると胸が痛んだり、彼が楽しんでいると楽な気持ちになったりするだけだ。決してあんな事をする相手では・・・・・・

「ああもう、何なのよ！！」

怒鳴り、真っ黒な机を思い切り叩く。
しかし人間の力ではビクともせず、逆にこちらの手を痛めた。
黒い一辺１５０ｃｍ程の正五角形の黒机は鈍い光沢を放つ程に磨きあげられており、上から屈み込む私のシルエットを造作も無く鮮明に映し出した。怒り、照れ、羞恥、不安・・・・・・　その表情の哀れさに、思わず失笑すらこぼれてくる。

「・・・・・・部屋へ戻って考えたら？
それとも相談に乗った方がいいのかしら」

黒永邸で、主である私に敬語を使わない者は一人しかいない。

「夜子・・・・・・・・　そうね、少し聞いて頂戴」

私は少しだけ考えたが、やはり一人で考え込むよりは友人である夜

子に相談した方が良いと考えた。彼女は魔女、魔術師は基本的に頭脳明晰なのだ。しかも夜子は最高位の魔術師、賢者である。

夜子は「解ったわ」と言いながら、私の居る所の左隣の椅子に座った。

この机は座る位置が決められている。ここから時計回りに私、夜子、ユリック、エレン、シラハ・・・・・・・　五つの辺の前に一人ずつ座ることになっている。

夜子は古い友人でもある。相談する際にこれほど条件の合う存在は居ない。

シラハは何でも出来るが男なので理解して貰えないだろう。ユリックは夜子の執事だが・・・・・・・　まず男だし、私の予想が正しければ小馬鹿にされる気分なので避けたい。エレンは私のメイドだがこの手の話題になると騒ぐので言わない。

「夜子は・・・・・・　キスするとしたら、どんな相手？」

「何よいきなり・・・・・・・・・・

まあ、普通に考えれば好きな相手とするでしょうよ」

そうだ。好きな相手とするものだ普通なら！

「気分や勢いで、好きじゃない相手とする様な事はあると思うかしら？」

「好き　まで行かなくとも、多少好意があれば可能性は無く無い。酒に酔っていたり気分が高揚している時にはやりかねないと思うわ。・・・・・・・ただし、アリスは絶対に自分を失うタイプじゃ無いから・・・・・・・・・」

「無いから・・・・・・・？」

唾を飲み込む。

その通り、私は完全吸血鬼化しようと自分を失う事は無い。だからこそ今回はこんなに困っている。

その答えが、今、分かるのだ・・・・・・・・！

「もしそうなったら、私にはアリスが相手を好きだったとしか考えられない」

「それは無いわ」

結局、夜子に相談しても分かったことは無かった

◇◆◇◆◇◆◇

「お嬢様、コーヒーです」

「シラハ、ありがとう」

「シラハー私の分はー？　って嘘だよごめん！」

朝である。

エレンはメイドというより友人に近い。まあ・・・・・・　悪魔なのだ。
頭部から生えている蝙蝠形の小さな羽の上にカチューシャを着けており、位置的な問題で羽がカチューシャに挟まれている。直そうにも羽は身体の一部なので取り外せない上、可愛いので良しとしている。

シラハが片手間に投げたナイフを、エレンは親指と人差し指で掴んで止めた。
性格が対極に近いシラハとエレンの間では、基本的に喧嘩が多い。
最大八つまでのナイフを同時に扱う、人並み外れた霊力を持つシラハ。
不可視の魔力の糸を刃物の様に扱う、神魔になることを拒んだエレン。
シラハの能力では距離と位置を操り、エレンの能力では切断と結合を操る。

性格は対極に近くとも実力はシラハの方が数段上だが、所有する能力は相性が良い。戦術に関しても酷似している点が多く、『中距離～遠距離から複数の刃で切り刻む』という点に至っては全く同じである。
しかしエレンに切断系の攻撃が通用しない事を考えると、二人が戦えば互角。
シラハは一応魔術も使えるので勝率は下がるもののゼロには成り得ない。

「二人共、止めなさい」

「申し訳有りませんでした」

「すみませんでした」

まあ私の一声で止められるのだが。

シラハは「失礼します」と言い、一瞬で姿を消した。能力の瞬間移動だ。
尚、流石に自身以外の霊力等を持つものの位置を操るには莫大な霊力が必要らしく、戦闘開始直後に心臓や脳を引き抜かれてさような

ら、という事はまず無い様だ。

「お嬢様〜、今日は学校お休みですよね？」

「ええ、そうね」

「モンハンやりません？」

「・・・・・・・・・厭よ」

モンスターハンティングファイター、通称モンハン。
もうモンスターハ●ターで良いと思うのだが違うらしい。いちいち回りくどく、しかもそれに意味が無いのだ。題名だけ見ればクソゲーである。

そして、私はあのゲームがどうしても苦手である。
人間の身体能力で、魔力や神力や霊力が使用不可能。そんな虚弱な身体で魔剣でもない武器を持ち、ファイターの何倍もの大きさのモンスターに挑んでいくのだ。どうしても狂い沙汰としか思えない。

「お嬢様はまず装備を整えないから死んじゃうんですよー」

「普段服になんて頼らないもの。吸血鬼だから傷付いたら再生する

し・・・・・・・・・」

「・・・・・・・装備作り、手伝ってあげるわ」

「夜子・・・・・・・　分かったわ、やるわよ」

突如部屋に入ってきた夜子の一言で、仕方無くやることにした。
するとエレンは懐から携帯ゲーム機を三つ取り出した。

私は一つを素早く取り、夜子が二つ目を受け取った瞬間だった。
朝食を運んできていた筈のシラハは、既に盆を机に置き、エレンが持っていたはずのゲーム機を持って私の左後ろに立っていたのだ。

「私もやります。・・・・・・・エレン、もう一つ」

「え、これ？　ってちょっと！！」

エレンが残りの一つを取り出すと、次の瞬間にはそれをシラハが持っていた。
そしてシラハは夜子の傍にいるもう一人の執事に話しかけていた。

「貴方もいかがですかユリック？」

「僕もやりたかったんだ、ありがとう」

皆が黒机のそれぞれの位置に座り、オンライン集会浴場に集まった。
ちなみに今回プレイするのはＭｏｎｓｔｅｒＨｕｎｔｉｎｇＦｉｇｈｔｅｒ３ｒｄである。

「じゃあネブラ装備でも作りましょ？」

「アイツですか、解りました」

「お嬢様、解毒薬は必ず持ってきて下さい」

「分かってるわよそれぐらいは」

「・・・・・・・・あんまりです」

結局、私はみんなのお陰で少し楽になったのだった。

何でも無い事だが、仲間の大切さを改めて痛感した気がした。

もう、きっと迅翔と顔を合わせても大丈夫だろう・・・・・・・・

１３：『憂鬱の吸血鬼』（後書き）

凹んだ時、やっぱり効果的なのは気分転換だと思うんです。
今回で全員が憂鬱な気分を紛らわせた筈だと思います。
エレン「私は散々な目に遭ったけど！！」
感想等よろしくお願いします。
エレン「うおい！？　ちょっとまっ」

１４：『狐の妖神』（前書き）

どうも霧貴迅翔です。これから前書きはキャラで回していきます。

一応俺が主人公のはずなんですが最近は出番が無く、今は読者のみなさんに見えない所で無駄にクオリティの高いオカマと買い物もといデート中という嬉しくも何ともない状況です。

視点がコロコロ変わって誰が主人公か分からなくなってきた方もいると思うので一応言っておきますが、主人公は俺です。

１４：『狐の妖神』

白葉木神社本殿前・・・・・・・・

そもそも白葉木神社とは、この小山全体を指す名称である。

まず入り口の鳥居を潜って石階段を少し登るとこぢんまりとした広場があり、そこに二つの建造物が存在する。正面に見える大きな建物が拝殿、左手奥に見えるのが普段巫女の居る社務所だ。
ここが境内だと勘違いする者も多いが、あくまで境内は山全体。
正式にはここは幅の広い表参道である。

拝殿裏には更に山の頂上へと続く石階段があるが、特殊な妖術を掛けられている為、まず人目に触れる事は無い。これは幻術とは性質が異なり、『見えなくする』のでは無く『無い事にする』術だ。
そして何を隠そうこの石階段の先の、裏参道の奥に在るのが本殿である。
六天幻守護者・白葉木桃綺はここ、街を見渡せる山の頂上の本殿に居るのだ。

「およ？　あやめさんがいないですねぇ・・・・・・・・・・
仕方無いです・・・・・・・　たのもー！！」

巫女であるあやめが居ないので致し方在るまい。
本殿の扉に両手を掛け、勢い良く左右同時に開いた。
するとそこにはＰＳＰを持った甚平姿のあやめとパジャマ姿の桃綺が。

「うわぁ水月さん！？」

「んみょ・・・・・・・？」

私はそこから一歩も動かず、開いた扉を閉めた。

「銀華さん蒼姫さん留守みたいです帰りましょう」

「いやいや、んみょ・・・・・・？　って聞こえたから！」

「あやめー！とーきー！　寝坊するとにーとになるよー！！」

蒼姫はどこでそんな言葉を・・・・・・　って私が教えたんだった。

・・・・・・・・　鞍馬水月は見た

六天幻守護者・十八尾の神狐・天下無双の妖獣・・・・・・・・・

白葉木桃綺。

彼女はまるで休日の根暗少年の如く、１１時半まで巫女とゲームをしていた。
パジャマは胸元まではだけており、もとのアレのサイズと相俟って妖艶。
・・・・・・・・・だらしない上に年頃の男子にはとてもじゃ無いが見せられない。

少しすると、巫女服に着替えたあやめが本殿の裏口の方から出て来た。
半袖長袖両用で肘辺りが無く、そこがボタンと細い布で付けられた巫女服。
冬場はとても耐えられないので中にヒートテックを着るらしい。
このデザインはあやめの母が考案したものらしく、お洒落である。

「お恥ずかしい所を見せてしまいました・・・・・・
水月さん蒼姫さん銀華さん、お早う御座います」

「いやもう遅ようだから」

「おそよーあやめ！！」

流石は化け猫、銀華は突っ込みの早さも一級品である。
そして蒼姫はかわいい。蒼影が溺愛するのも分か・・・・・・・る
までは行かないが。

それにしても・・・・・・　力は失ったものの、やはり性格や人格
はあの頃のままだ。

天真爛漫自由奔放。普段は何も考えていないようだが実は誰より悩
んでいる。
迅翔の力の事も自身の力の事も、いずれ起こる六天幻との戦いの事
も・・・・・・・・・

やはり、ここへ連れてきて正解だったか・・・・・・・・・

「参拝者達よ!!私が十八尾の神狐・白葉木桃綺だ!　歓迎する!
!」

「何だろう・・・・・・・　力は凄いのに威厳を全く感じないよ・・・
・・・・・・」

「とーき、無理しないで？」
「桃綺様もう遅いです」

本殿の扉が勢い良く開かれ、着物に着替えた桃綺が言った。
威厳ゼロ。
実力は確かなのだが・・・・・・　どうも上に立つ者の覇気を感じない。

「全く・・・・・・・・　六天幻守護者の名が泣きますねぇ」
「・・・・・・・・・ぐずっ・・・・・・・・」
「泣くなババァ」
「・・・・・・・・・はい？」
「あっちょ水月さん！？　桃綺様も抑えて下さい！！」

『ババァ』という単語が桃綺の絶対の禁句であることを知らない私ではない。
一瞬にして今まで九尾だったのが十八尾になった。

かつて茨木千夜がこの言葉で桃綺を挑発した瞬間に喉元に刃があったという。
アリスと同じく六天幻に近い実力を持ち、桃綺とは宿敵同士の関係の男だ。
桃綺は普段から常に自身の力を尻尾の本数で調整する癖があるが、この一言を放つことにより一瞬で十八尾、つまり全力を出させられるのである。

桃綺は尻尾の一本を乱暴に横に振り、映世への入り口を開いた。

「来い、話はそれからだ」

私達は桃綺に続いて、薄蒼い空間の裂け目に入って行った。

・・・・・・・これより蒼姫強化作戦第一段階突入である。

◇
◆
◇
◆
◇
◆
◇

「蒼姫さん、観るだけ観てて下さい。
桃綺さん程の妖力と神力に触れれば、少しは感覚を思い出せる筈です」

「水月・・・・・・　大丈夫なの？」

「そうだよ、勝てる訳無いじゃん」

「何、少し逃げ回るだけですよ。生憎銀華さんより速いんで。
それと蒼姫さんは・・・・・・・・」

小声で二人と話し、少し離れて立っている桃綺とあやめを見る。
あやめはどうにか止めようとしているが、今の彼女では止められまい。

「水月・・・・・・・　確認するけど、さっき何て言った・・・・・・・・？」

「泣くな、バ　バ　ァ！！　と言いましたが何か？」

隠していた翼を広げ、高速で横に飛翔する。
すると元居た場所に槍のように尖った尻尾の高速の突きが来た。
飛んだ先では既に桃綺が拳を構えており、尻尾が全方位から迫り来る。
八本の尻尾の合間を縫うようにすり抜け離脱、残り九本の長刀状になった尻尾による追撃を一つずつ七本目まで躱し、二本を誘導して尻尾同士でぶつけた。
最後に桃綺の左後ろまで飛び、パンチを回避。
余波の妖力と拳圧は蒼姫と銀華に当たる寸前で消滅した。

この間、実に約４秒。まだまだ私も捨てたもんじゃあ無い。

「あれれ、こんなもんですか十八尾の神狐さん？」

「・・・・・・・・・やはり鞍馬水月は違う。もう本当に死んでも知らない」

能力発動か。どうやらやっと本当の本気らしい。
・・・・・・・ いや、解放もある事を考えると半分が良いところか。
そろそろ私も能力を使わないとまずいかもしれない。

「まあ、もう死んでるから死なないですけどねぇ」

僕は天狗、あたしは死、私は神亡天狗霊・・・・・・・・

死んだあの日から、僕があたしと出逢った日から、私は私になった。
『天狗』と『死』、『僕』と『あたし』は、あの日からふたりでひ

とつ。

死は僕の友、死は私の一部。私は今更あたしを怖れることはない

14：『狐の妖神』（後書き）

感想等よろしくお願いします。あと俺の存在も忘れないで下さい。

そういえば、みてみんとｐｉｘｉｖにイラストを投稿しました。

ｈｔｔｐ：／／３４７６．ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／ｉ３５８４４／

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｐｉｘｉｖ．ｎｅｔ／ｍｅｍｂｅｒ＿ｉｌｌｕｓｔ．ｐｈｐ？ｍｏｄｅ＝ｍｅｄｉｕｍ＆ａｍｐ；ｉｌｌｕｓｔ＿ｉｄ＝２３３０２０８７

あやめと桃綺の黒板風イラスト・・・・・・・・・・

どうやら下書きの色を変えて少し描き足しただけみたいです。

１５：『天才人間映世入り』（前書き）

どうも白葉木あやめです。

前回は水月さんが桃綺様を挑発し戦闘に入りました。
ですが今回は迅翔さん達のお話になるようです。
ちなみに桃綺様は六天幻ですが、その自覚はあるのか分かりません。
きっとあのお方は色々考えているのです。そう信じたいです．．．．．．．．

15：『天才人間映世入り』

「迅翔ー」

「うん？何だ裁・・・・・・じゃなくて零那」

「このゆっくりとこのゆっくり、どっちが良いと思う？」

「うーん・・・・・・　左だな。お前から見て右」

オタクショップのとある超大規模同人作品&その二次創作コーナー。今やコミケ会場の何割かをこの二次創作サークルが占領しているらしく、最大の同人作品と言っても過言では無いほどの知名度を誇る何とかプロジェクト。当然知名度が上がればそれに比例して意味不明な二次キャラクター等も出て来る訳で、このニヤケ顔1頭身生物（？）はその代表的な例として挙げられる。

『見る者にストレスを与える程度の能力』とでも言うかの如く、こちらを馬鹿にしたようなニヤケ顔は見ていて非常に気分が悪くなる。

・・・・・・・・・で、だ。

何が悲しくてオカマ（男の娘ってやつ？）と二人でこんなところにいるのか？
良く考えれば可笑しな話である。

そもそもオタクの買い物に付き合わされるのが間違っているのだろう。
万が一そのオタクが自分の彼女だったりした場合は話は別なのだが・・・・・・・・
無駄にクオリティが高くドキドキさせられてしまうのも気に入らない。
変な話だが、家に帰れば本物の美少女達が居るのである。いくら友人とはいえ女装男子とデートを演じる必要があるのだろうか？　否、無い。

「分かった、ありがとう！　買ってくるね」
「ああ早く行ってこい・・・・・・」

無駄に可愛いのも、イライラする要素の一つである。

◇
◆
◇
◆
◇
◆
◇

「お昼どうする？」

「・・・・・・適当にマックでも行くか」

公園である。疲れる買い物はもう終わったのだ・・・・・・

結局、途中で帰るのも面倒くさくなった。
まあいつもの事なのだが。

と、裁見と共に歩きだそうとした瞬間だった。

今までに感じた事も無いような、途轍もなく大きな妖力と神力を感じたのだ。
当然発生源は映世だったが、場所は白葉木神社の方向だった・・・・・・・・

「零那悪い、トイレ行ってくる！！」

「あう？　ちょっと迅翔！？」

俺は裁見にそう告げ、全力で公園の隅にある公衆トイレへ走った。

◇◆◇◆◇◆◇

「零那悪い、トイレ行ってくる！！」

そう言って、迅翔は物凄い速度でトイレに向かって走り出す。

「あう？　ちょっと迅翔！？」

・・・・・・・・様子が変だ。
知る限りでは、迅翔はいきなり叫んで走り出すような奴じゃ無い。
それも今回は何故か焦っているように見える。

何かある。
そう確信し無言で、尚且つ全速力で迅翔を追い掛ける。
・・・・・・・が、何故か距離が詰まらない。こちらは１００ｍ走１１秒の記録を持ち、対する迅翔は１００ｍ走１５秒。少し距離があろうと追い付けない筈が無いのだ。

結局最後まで追い付けず、トイレの入口の所でやっと迅翔の姿を捉えた。
しかし、そこで見えたのは、現実世界では有り得ない光景だった・・・・・・・

迅翔は、いままで持っていなかった筈の日本刀を手慣れた様子で抜

刀した。
その蒼い刃の刀を振ると、そこに某スキマのような空間が開いた。
そして誰かに「行くぞ」と言ったのと同時に、蒼い雷が迅翔を包んだ。
雷が消えると、黒い服を纏い髪も蒼く染まった迅翔が・・・・・。

迅翔はそのまま、スキマよりは禍々しく無い空間の裂け目に入っていった。

建物の陰に隠れていた『私』は、気配を殺し、そのまま迅翔を追い掛けた

◇◆◇◆◇◆◇

「・・・・・・もう消えてる・・・・・・・・・・・？」

急いで映世入りしたものの、既に妖力や神力は感じられなくなっていた。
俺は妖力等を察知するのは不得意だが、あれ程の力を読み間違える筈は無い。

―　・・・・・・調べる必要はあるが、急ぐ必要は無いだろうな。
　それよりまだ三回目の映世入りだ。少しぶらぶらしてみたらどうだ？　―

それもそうだな・・・・・・　久し振りに影と話した気もする。

―　正確には会話では無い。あくまでそれよりも単純な意思疎通だ
―

はいはい分かった。では少しぶらぶら・・・・・・・・

「おうにいちゃん！　あんた見ない顔だけど妖神かい？」

「・・・・・・まあそんなところだな」

ぶらぶらしようとしたところで、移動式屋台のおっさんに遭遇した。当然映世に人間は居ない。禿げあがった頭頂部からは円錐が一本。

言わずもがな、鬼である。

こいつらの副頭領の茨木千夜のせいで、俺は多少苦手意識がある。状況が完全には理解出来ていない状態でフルボッコにされ殺されかけたのだ。

いつかフルボッコにしてやろうとも思うがやはり嫌だ。会いたくない。

―　いずれ戦うことになるだろう。

六天幻を全員倒して説得しなければ、根本的な解決にはならん　―

もう嫌だ。でもこのおっさんは良い人そうだ・・・・・・・・

「どうだい、呑んでかないかい？」

「だが断る！」

外見で年齢を判別出来ないのは不便である。
未成年者の飲酒は法律で禁じられています、だ。

「ガッハッハ！！　冗談だ！　酒は生憎切らしてる！！
・・・・・・・まあワシが呑んだんだがなぁッハッハッハ！！！！！」

「・・・・・・・・・」

やはり、酔っ払いのテンションは謎である。とてもついていけない。

「・・・・・・・・まあ取り敢えず、もんじゃでも食ってきな！」

「でも俺金持って無いぞ？」

「にいちゃん人間かよ！？　無料だぜタダ！！」

「・・・・・・・そうだな、じゃあ一つ頼む」

・・・・・・・・・映世の屋台は無料なのか。良いこと知った。

ー　悪魔等の悪質な屋台では内蔵を要求される事もある。気をつけろ　ー

なにそれ怖い。

おっさんは屋台の持ち手の所から移動して準備を始めた。手際良い。

「ところで・・・・・・」

「うん？」

鬼のおっさんは思い出したように言うと、俺の左後ろ方向を指差した。

「お連れさんかい？」

「・・・・・・・・は！？」

「あ！！」

指の先では、映世には居るはずのない人間が、電柱の陰でこちらを見ていた

「・・・・・・・・迅翔！？」

「零那！？」

１５：『天才人間映世入り』（後書き）

感想等よろしくお願いします。

そういえば二話目に「白黒の巫女服」という文がありました。濃い青色の袴と薄い桃色の巫女服が、映世の蒼い光との関係でそう見えたようです。

１６：『二度目の鬼』（前書き）

どうも霧貴蒼姫です！　えーっと．．．．．．．てーねー語じゃなくてもいいんだよね？

迅翔ががんばってるみたい。わたしはいま水月ととーきのケンカをみてるよ。
なんか思いだせそうなきもするんだけど、やっぱりよく分からないね？
だから今はがんばってる迅翔をおーえんしてるんだ！
．．．．．．．．次は影かな？

16：『二度目の鬼』

「うん。意味分からない」

「はぁ・・・・・・　むしろ分かった方が不自然だろ」

「それ自分で言っちゃう？」

「自分が最初の被害者だからな」

「ああなるほどね、つまり迅翔も意味分からなかったと」

「そうだ。そして何故か全員冷静になる」

こいつの場合は特に、だ。
茜のように未知の力に気付いていた訳ではなく、まして俺のように思考中枢がフリーズしている訳でも無い。やはりこいつは天才である。

・・・・・・・　などと考えながらもんじゃ焼きを食べる。

それっぽいおっさんが作ったそれっぽいもんじゃ焼きは普通に美味しい。

「でも一つはなんとなく分かった、霊力ってこーゆうの？」

「・・・・・・・・天才が」

『人間にも霊力っていう力がある』という程度の説明しか俺はしなかった。
それでも天才（こいつ）は、立てた人差し指の先に鬼火を出して見せたのだ。
無論、妖力等を軽く燃やすだけの鬼火は術全般において基礎中の基礎である。
それでも人間が霊力の存在を知っただけで出来る様なものでは無いのだ。

―　こいつは天才だな。恐らくは数百年に一人の逸材だろう。
・・・・・・尤も、まさかこんな所にこんな人間が居るとは思わなかった。
私も永く生きて来たが、この目で見るのは晴明以来か・・・・・・・・・　―

晴明・・・・・・　安倍晴明、伝説的な陰陽師か。
というより裁見が本物のチートである事が証明された。されてしまった。

「これ鬼火ってやつだよね？」

「ああ。ちなみに普通の奴がイメージだけで出せるもんじゃない」
「もんじゃだけに、ってか？　ガッハッハッハッハ！！」
・・・・・・・・・・。
「・・・・・・・うん。でも私出せたし、割と出来んじゃないの？」
「割と出来ないからお前は少し自分の異常さを自覚しろよ」
「半妖の兄ちゃんが言える事じゃあねぇがな」

・・・・・・・そういえば、鬼っていうか映世の妖魔達は人間嫌いじゃ無かったか？
―　中でも人間を毛嫌いする奴は居るが、基本的に映世では問題無い。
まず映世入り出来る時点で人外も同然だろう。
・・・・・・・・・人の血を半分引いているだけで迫害を受けることもあるがな　―
なる程、その妖魔次第か。安心した。
「確かにね。力？が二つあるように見えるよ」

「そうかい。ちなみに事情は説明した通りだ」

霊力と妖力の違いまで分かるとは・・・・・・

ちなみに影は神格化していないので神力は存在していない。

不意に、おっさんが声のトーンを変えて話し出した。

「・・・・・あんたが伝説の、最強の妖刀の使い手か。

うちの副頭領が話してたぜ、「あいつは強くなる」ってな！　勝負だ！！」

「うわっ！ちょ・・・・・・　いきなりは危ないだろ！！」

「・・・・・・・・うわぁ凄」

両手で零那を抱え、後方に大きく離脱。冷静なのは取り敢えずスル。

おっさんの重そうなパンチを回避して怒鳴った。危ない。

・・・・・・・・・零那の胸に軽く当たった時の柔らかい感触は気の

せいだろう

お姫様抱っこしていた零那を下ろし、鞘ごと影を左手に具現化。
まずは無難に、鞘と同じ日本刀サイズの刀身で抜刀した。

「先に言っとくが、俺はあんたを殺す気は無い。　霧貴迅翔だ！」

「殺す気で来ないと・・・・・・　死ぬぜ迅翔」

同時におっさんの大きかった体が霧散し、同年齢ぐらいの青年に姿を変えた。
灰色に近い青の髪が現れ、頭頂部では無く額から上に反った豪壮な角が一本。

まあ気付いていたのだが。幻術は不得意なのだろう。
そして鬼は、無駄に大きな妖力と神力を発散させながら叫んだ。

「俺は四天王唯一の生き残りにして詩妖（しより）理様の左腕、千夜様の右腕！
摩擦を操る一本角！　虎熊誠義（とらくませいぎ）だ！！」

大気を震わせ地を揺らし、鬼は自らを名乗った

◇
◆
◇
◆
◇
◆
◇

「『雷羽葬刃』！！」

蒼い刃の刀に鳥の羽の形の雷が纏い、同時に迅翔の背中に四枚の羽が現れた。
閃光の如き蒼は風を切りながら、鬼の首を跳ねんとばかりに飛び掛かる．．．．．．．．．．

「速度、剣術、反応、そして能力の雷。一般の妖神を凌駕するレベルだ」

しかし鬼．．．．．．．虎熊誠義は、それすら紙一重で躱し、すれ違う瞬間に迅翔に一撃を与えたのだ。当然人間である私の目で見えてはいない。
ただ迅翔が大きく後ろに吹き飛び、鬼が拳を突き出していたのである。

「だが如何せん、攻撃力が足りない。
拳を神力で保護しただけで、斬撃に正拳突きを合わせれば吹き飛ばせる。
咄嗟に後ろへ飛んで威力を殺したのは正解だったな」

「・・・・・・・ぐっ・・・・・う・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・迅翔！？」

崩れた家の瓦礫の中から出てきた迅翔の左腕はあらぬ方向に曲がり、辛うじて刀を握っている右腕もガタガタと震えていた。
右腕全体に蒼い雷を纏わせて、それで無理矢理動かしているのだろう。
恐らくは骨に罅くらいは入った状態の右腕を、だ。

何より、刀を真正面から殴って吹き飛ばすだなんて規格外も良いところだ。
それに加え迅翔の刀は妖刀。ただでさえこの世の刃物の中でメスの次に切れ味が高いと言われる日本刀の、数倍は切れ味も威力も高い筈なのである。
更に雷も纏っている為、電気メスの原理で更に鋭さを増している。
しかもあれ程の電気圧ならば並みのスタンガンを大きく上回っているだろう。

・・・・・・・・・鬼は強いイメージがあったが、まさかこんな化け

物だったとは。
迅翔からの説明と鬼の発言から考えると、これよりも強い鬼が最低二人、強い妖怪や悪魔が最低八人は存在することになる。その内の二人・・・・・・　力を失ったという元最強の妖神らしいロリ転校生と九尾ではなく十八尾のクラス新担任に加え、その六天幻とやらに近い実力を持った眼帯ゴスロリ白髪ツインテの白黒嬢も味方らしい。それでも、迅翔と妖刀・蒼影の言う「そいつら全員倒して説き伏せる」なんて絶望的だ。

「やはり蒼影の能力が使えない以上、六天幻どころか俺にも勝てないか」

「・・・・・・・・」

「何だ、終わりか？　・・・・・・・・・口ほどにも無いぜ迅翔」

どう見ても迅翔は満身創痍、鬼の勝利はほぼ確定したと思われた。
事実、対する鬼には掠り傷一つ付いてはいなかったのだ。

「・・・・・・迅翔っ・・・・・・・・・・・・！！」

迅翔の方に歩いていく鬼を見て、私は思わず目を瞑った。

人間である私には、今から起こる惨劇を見ない様にする事しか出来なかった。

しかしその時、迅翔は、確かに不敵の笑みを漏らしたのだった・・・・・・・・。

「・・・・・・・・雷は基本・・・・・・・　空から落ちてくるもんだ！！」

瞬間、蒼く、そして巨大な無数の雷が、天から鬼を目掛けて落ちた

「『神牙招雷』！！」

１６：『二度目の鬼』（後書き）

感想等よろしくおねがいしまーす！！

ん？なにかなこれ．．．．．．．

ｈｔｔｐ：／／３４７６．ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／ｉ３６７７２／
ｈｔｔｐ：／／３４７６．ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／ｉ３６７１９／

．．．．．．．わたしとアリスだね。

「恥じらう」ってどういう意味かな？　帰ったら迅翔に聞いてみるね！

１７：『弱く強く』（前書き）

どうも蒼影だ。

今回は私の昔から苦手な、奴が登場するようだな。
ピンと来ない者は０７話を読み返してくれ。すぐに分かる事だろう。
それより姫を出せ！何故三回も姫無し話を挟むんだ！！
・・・・・・・・・まあいい。次は茜か？おそらく茜だ。

17：『弱く強く』

「・・・・・・甘いぜ、迅翔・・・・・・・・・・・・・　確かに左腕は使い物にならないが」

「嘘だろ・・・・・全力だぞ・・・・・・・・・・・・・！？」

俺は『全力の雷』を、今まで一度も出したことが無かった。
それでも銀華との戦い等で大いに活躍した、影の次の攻撃手段だった。
確かに鬼の左腕は肘から消し飛んだが、それ以外に傷は付いていない・・・・・・・・

―　一つはっきりしたな。その雷は攻撃以外の何かの為の物だろう。
・・・・・・・・・能力解放した時には解る筈だが、今でも推測は可能だ　―

推測・・・・・・・　左腕は複雑骨折している。右にも罅は入っている。

影の能力で痛覚を断ち切っていなければ動けないだろう。
雷を纏えば右腕はまだまだ使えるし、普段からも刀は片手持ちである。

―　身体能力強化型なのは解る・・・・・・　だがどうする？
　万に一つも勝ち目は無い、相手は鬼の四天王だ　―

・・・・・・それに今気付いたが、肋骨と両脚にも罅が入ってる・・・・・・・・

「・・・・・・限界みたいだな。
痛みは感じないようにしてやる、目を閉じてりゃいい」

妖力を纏った手刀を構え、ゆっくりと歩いてくる鬼。
雷羽で飛ぼうにもさっきの一撃で妖力切れ、霊力も殆ど残っていない。

万事休す・・・・・・　か。

「・・・・・・・・」

「何のつもりだ？　そんな陳腐な武器が通じない事は解ってる筈だぜ？」

駄目だと思ったその時、鬼の首筋にナイフを押し付ける裁見が目に映った。

「裁見・・・・・・逃げろ！　殺されるぞ！！」

「目の前で友達が殺されそうなのに逃げられるか！！」

「・・・・・・・・反吐が出る！！」

弾き飛ばされたジャックナイフが、カランと鋭い音を立てて地面に落ちた。
裁見の霊力のこもった重い正拳突きが鬼の脇腹に直撃した。

「ほう・・・・・・　違う出逢い方をしてたら、いい友達になれたかもしれないな」

「！　っあッ！！」

「おい裁見！？」

霊力を完全に弾いた鬼の正拳突きをガードした裁見は吹き飛ばされ、近くにあった民家の外壁に背中から激突した。噎せるように息をす

ると紅い血が口から大量に吐き出された。それでも目線は鬼をしっかりと捉え、睨んでいた。

・・・・・・・・見てるだけなんてもう無理だ。暴走したって構わない・・・・・・・

―　止めろ馬鹿者！取り返しのつかないことになるぞ！！　―

「全く・・・・・・・　蒼影、アウトかしら？」

「・・・・・・・・・ギリギリセーフだ」

「！？」

突然目の前に現れた、小さめの十字架を持った白黒の少女。
言うまでもなく、納めた影を抜刀しようとした俺を止めたのは彼女だった。
彼女は柄には触れずに俺の腕を物凄い握力で掴んで止めていた。

「・・・・・・・アリス！？」

俺が柄を握っていた右手から力を抜くと、アリスは手を離して早口で言った。

気のせいか、少しあどけなさの残る小さな整った顔は若干紅潮していた・・・・・・・

「助けに来た訳じゃ無いわよ！

・・・・・・・・蒼影が暴走したら桃綺と私の二人掛かりでも止められるか怪しいから止めたのよ！別に貴方は関係無いわ！勘違いしないで頂戴！！」

「ああ・・・・・・・　ごめん、ありがとう」

「・・・・・・・・・ふん」

彼女は振り返って鬼の方を見た。眼帯は着けたままで、やはり髪は白かった。

その表情は見えなかったが、アリスはただ堂々として、凛としていた

◇◆◇◆◇◆◇

「シラハ」

「はい」

シラハが裁見?を抱きかかえて瞬間移動したのを見届けた。

あれは肺が半分潰れている・・・・・・　心臓にも大きいダメージがあるだろう。

重体レベルの傷は夜子に任せるとして、迅翔も処置が必要だ。
霊力で通常とは上下逆の五芒星を前に描き、簡単な詠唱を唱える・・・・・・・・

「翡翠の闇の化身、今此処に顕現せよ・・・・・・　エレン、任せたわ」

「りょーっかいです！！」

エレンの武器は魔力の糸、糸は織り重ねれば包帯にもなる。
神力は持っていないが最低限の回復術は使える為、応急処置程度は可能だ。

「解らないぜ天楼門。何故人間の味方をする？
お前程の、詩妖理様が一目置く程の、真祖を皆殺しにする程の力を持ちながら
何故脆弱な、愚鈍な、俺達幻想を騙す様な人間共の味方をするんだ！！
だからあの蒼姫の力も封印された！　最強最古の妖神の存在が、その選択が、
幻想(おれたち)の存在が現実(にんげん)の存在に滅ぼされる結末を示した！！
お前が力がありながら六天幻にならなかったのは人間の味方をする為か！？」

鬼は・・・・・・虎熊誠義は左腕を失いながらも、虎のように牙を剥き出して吼えた。
手負いの獣は恐ろしいと言う。・・・・・・・・・だが

「人間が弱いだけだと思うのなら、試してみるが良いわ」

確かに人間は弱い。だが、だからこそ強くなろうとするのが人間だ。
私は、私を護る為に強くなった人間も、私と友である為に強くなった人間も知っている。そして私が幼い頃、半人半魔の私を護って死んだ人も・・・・・・・・・

「貴方は人間状態(このまま)で倒す・・・・・・　人は弱く強く、強い！！」

「いいだろう・・・・・・　人として、己の無力を知れ！！」

収めたままのダーインスレイヴを地面に突き立て、霊力で五芒星を描く。
魔剣ダーインスレイヴは闇と共に姿を消し、それと全く同じ場所に、全長約１５０ｃｍもある聖剣デュランダルが光と共にその姿を現し

た。
地面から抜き身のデュランダルを抜き取り、虎熊の方へ切っ先を向けた。

「聖剣デュランダル。貴方を斬るには充分な武器よ」

「・・・・・・まさかあの噂が本当だったとはな。伝説級の聖剣や魔剣は力に関係無く一人一つが所有限界だが、半人半魔は二つ所有出来るのか」

「そう。普通の妖魔がこんな事をすれば魂そのものが掻き消えるわ。尤も、このデュランダルを本当の意味で扱えるのは人間の時だけよ」

「最強の妖刀に加え、最悪の魔剣と最高の聖剣まで敵に回るとはな。だがあくまでも最強は蒼影だ。迅翔はまだ蒼影を扱えてねぇ。お前がそのまま来るなら好都合、脅威を二つ消せる・・・・・・・・・いや、真祖であるお前自身も六天幻守護者に劣らない脅威だから三つだ!!」

虎熊は姿勢を下げて跳び掛かってきた・・・・・・　双手刈りか。片手の無い柔道技など恐れるに足らないが相手は鬼、腕力は異常だ。無難に半回転して右手を躱し、そのまま右脚に霊力を込めて背中を蹴る。

「馬鹿が！」

動じなかった虎熊はそのまま脚を掴んだ。
私の動きを封じると、虎熊は口に莫大な妖力と神力を溜めて言った。

「早いうちに終わらせようぜ。吸血鬼化しなかった事を後悔するんだな」

破滅を具現化した様な蒼白い光線が、私の目の前で轟音と共に放たれた・・・・・・・・・

「な・・・・・・　に・・・・・・・・・・・・！？」

「『空間剥離（スペースエクスフォリエーション）』。残念貴方はガス欠よ」

完全吸血鬼化していても防ぎきれない程の光線は、私の眼前で激しく弾けた。
『空間剥離（スペースエクスフォリエーション）』。解放のみ存在する能力。
私の最大値の半分の霊力を消費する代わりに特定箇所の空間そのものを剥離させ、一瞬だけ全ての干渉を完全に遮断する最強の盾。
蒼影の斬撃を防げる唯一の方法だが、一日二回が限界だ。

残り三割程度になった霊力・・・・・・　力が残り一割を切るとまずい。
血液に含まれ全身に運ばれる筈の力が無くなり、肉体が朽ち始めるのだ。
虎熊の妖力はもう一割程度しか残っていないだろう。空間剥離でこそ防ぐことが出来たが、鬼の全力攻撃の単純な威力は全種族中最強・・・・・・　種族的には吸血鬼がその次に強いが、やはり真祖でも無い限り力押しでは戦えないだろう。
そもそも吸血鬼は腕力だけが取り柄では無い。最速の天狗にも劣らないスピード、最高の魔法を扱う魔女にも匹敵する魔法力、不死にも近い再生能力、更には身体を無数の蝙蝠に分けたり完全な霧状態になる事も可能。ただ幾ら真祖、神魔と言えども、完全吸血鬼化すれば吸血鬼としての決定的な弱点が一つだけ戻ってしまう。私の場合は太陽光、最も分かりやすく尤も定番過ぎて疑われる事の無い弱点だ。吸血鬼の真祖や始祖は力が完全に尽きようとも残った一つの弱点を突かれない限りは死ぬことが無いが、弱点を突かれれば人一人も殺せない程に弱体化する。
ちなみに迅翔は妖力がほぼ尽きたが、人妖は片方の力が残れば殆ど

問題ない。

「妖力も神力も尽き掛けた身体、伝説級の聖剣で斬ったらどうなるかしら？」

「呆気なさ過ぎると思ったら・・・・・・・　これが狙いか・・・・・・・・・」

「・・・・・・・私の視界から消えなさい。猶予は一分よ」

「クソが！」と言いつつも退散を始める鬼。妖神は傷付き逃げ去ったようだ。

当然反撃には警戒するが、四天王を殺したりすれば鬼達との全面戦争に発展するだろう・・・・・・・　いま六天幻守護者、鬼神・伊吹詩妖理や副頭領・茨木千夜を含む鬼と戦うのは芳しくない。ただでさえ強大な上に、他の六天幻守護者があちらの味方をする可能性も高い。

私が『本気』を出すという手もあるが、個人的にはやりたくないのが本音だ。

「ふう・・・・・・　全く、貴方は私が居ないと何も出来ないのかしら」

迅翔に話し掛けた私が微笑していた事に、私は気が付かなかった

１７：『弱く強く』（後書き）

感想等頼む。姫が可愛いという内容なら尚頼む。

ｈｔｔｐ：／／３４７６．ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／ｉ３７８９７／

姫だな。どうやらまだ下書きらしい。あいつは仕事が遅いからな。

ちなみに人妖化迅翔が抱かれているがよく見ると私も居るぞ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0841w/

リフレクトファンタズム　～Azure of Wonderworld～

2011年12月29日10時45分発行